

臨床哲学のメチエ

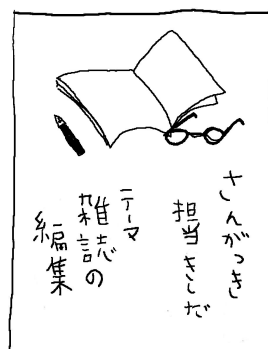
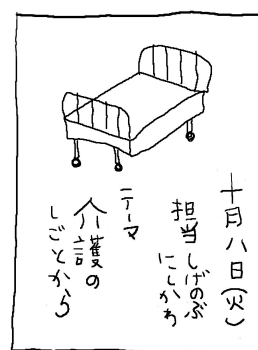
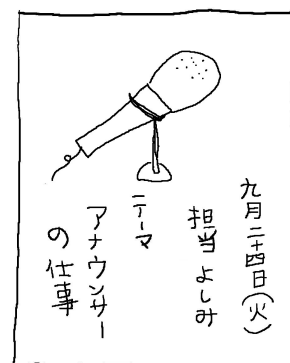
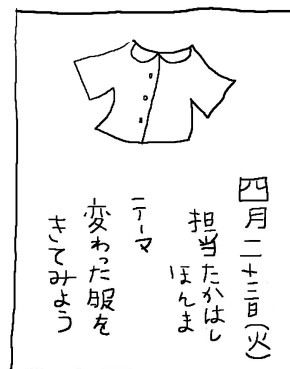
臨床の知のネットワークのために Vol.11 2003 冬春号

特集 高校での哲学教育

大人たち、高校生に「出会う」

臨床哲学のメチエ

特集 高校での哲学教育
おとなたち、
こーこーせいに
「出会う」







ひとと出会う哲学

開講までの経緯について

三浦隆宏

— きっかけ

たとえば大阪大学と「高大連携」を組む北野高校や、あるいは豊中キャンパス周辺の高校であるならば、話はわかりやすい。だが、なぜ、茨木市の北西部に位置する福井高校で、臨床哲学研究室のメンバーが「哲学」の授業をすることになったのだろうか？ 関西の地理に unfamiliar な方であれば、このような疑問を持たれても当然であると思う。それゆえ、福井高校と臨床哲学研究室との 出会い について述べることから始めることにしよう。

きっかけは3年前にさかのぼる。——当時、3年目を迎えていた金曜6目のセミナー「臨床哲学講義・演習」では、過去2年間の共同での議論（そこでは主に、「ケア」や「現場性」という概念についての検討、および看護・教育関係者と大学内部の教官・院生とのあいだでの「ことばのすり合わせ」がおこなわれていた）をへて、より個々の場面に即したかたちでの取り組みをしてゆきたいという気運がメンバーのなかに高まりつつあった。そこでこの年（2008年4月）から、メンバー全員が一堂に会する「全体会」と、いくつかの小グループごとに継続して議論をおこなう「分科会」の、ふたつの会を併用するというプランが採られることになる。（この方式は現在もつづいている。）

そして、この年3つに分かれた分科会のうちの1つが、2002年度からの国実施をまえにして、当時いろいろと注目されることの多かった「総合学習」について考えるグループであった。当時、博士後期課程に在学していた現役の看護婦である武田保江さんのことば、「自分の娘が通っている小学校で実験的におこなわれている『総合学習』という試みにたいしては、親として不安をおぼえる」を受けて、現在の「教育（改革）」について考えてみようとしたのである。

かし、この取り組みにはひとつの問題点が存在した。武田さんは東京から日帰りで大阪まで学びに来ており、時間の都合上、金曜日の6限目にはなかなかフルタイムで参加することができなかったたのである。その結果、私たちは当事者を 不在 にしたままで（さらに、参加者にとって

「総合学習」がまったく未経験のものであったことも重なって、いくつかの資料をもとにいわば当て推量で、議論を進めざるをえなくなった。このように、分科会を進めていくにつれて、いくつかの困難の存在が見えはじめていたときに、堀一人先生（大阪教育大学付属天王寺高校、なお堀先生にканしては『メチエ』vol.8の103頁を参照）から紹介されたのが、大阪府立福井高校であつたわけである。

いっぽう、その頃の福井高校といえば、翌年から「普通科総合選抜制高校」として大きく生まれ変わるのをまえにして、校長先生みずからが先頭に立つて、より特色ある高校となるように学校ゼンたいで取り組んでいる最中であつた。9、27に福井高校をとぜん訪ねた鷲田さんと私は思いもよらず大歓迎を受け、とりわけ教頭の岡田先生には「若い院生のみなさんが、生徒と接してくれることに大いに期待しています」とまで言つてもらつた。こつして、福井高校と臨床哲学研究室とのつきあいが始まることになつたのである。

2・森芳周さんのドリカム授業「マンガからテツガクへ」

翌月の10月からは私をはじめ研究室のメンバー数人が、福井高校のドリカム授業を見学するようになり、岡田先生には「来年度はじつさいに授業を担当してみませんか」とも誘わ訣

- 「難しい顔したオッサンが街角で自分の考えを言っている」そんなイメージだつたけど、ちと考えがかわつた。誰にでもできることなんだつて思つた。

- ぼくのイメージでは想像力が豊かな人がするものだと思つていました。マンガが題材だつたので少しみじかになりました。

- 生きていくうえでの真理、人生の意味、などを言葉にすることだと思つていた。今もそう。

生徒の「哲学」観を尋ねたのは、この頃私たちは岡田先生から「来年

度は選択科目のひとつとして、1年間の授業を担当してもらえないか」と誘われており、とりあえず生徒むけのシラバスを作成する必要があつたからでもある。生徒には「こつという授業であれば受講したいな、と思う授業ってどんなもの?」と尋ねて、生徒の意見を聴いたうえで、会沢久仁子さんと私がまず素案をつくり、それを研究室のメンバーに見てもらつたあと、10、15に以下のようなシラバスを福井高校に提出した。

——シラバス——

3・シラバスの意図

「いくら私たちが『こつという授業をやつてみたい』と意気込んでいても、生徒に選択してもらえなかつたら開講できなくなる。かといつて、あまりにも生徒に媚びたものでも……」と、いろいろ逡巡しながら「目的」「学習内容」「年間計画」の言葉をいくどか書き直したもののだが、私のなかで授業の意図そのものは揺らぐことがなかつた。そのことにかんして、若干の思いを述べておきたい。

話は前後するが、福井高校はこつし創立50周年を迎えるいわゆる「若い」高校であり、良くも悪くも「普通の」「平均的な」学生がつどう高校である。一学年約300人のうち、明確な就職希望者は50人ぐらいで、残りはいちおう進学を希望し、じつさいに大学・短大へ50人ぐらいづつ、専門学校へは80人ていどが進学する。そして、残りの生徒の大半は、いわゆる「フリーター予備軍」となつていのが現状である。

私がこの進路状況を知つたときに思つたのが、17、18歳の時点で、曲がりなりにも自分の進むべき道を選択せざるをえないというのはつらいものだな」ということであつた。私たち臨床哲学研究室の教官・院生に限らず、この『メチエ』を手にとつて多くの大学関係者のみなさんにおいても、高校生の頃は、その延長上に「大学」という存在がはつきりとあつて、それゆえ17、18歳の頃には、志望校や学部を選択をめぐつて頭を多少悩ますことはあつても、進学するか、それとも就職するか

という選択の岐路に立たされることはあまりなかったのではないだろうか。恥ずかしい話だけれども、私が始めて自分の進路について（ほんの少しばかり）考えてみたのは、大学4年の夏のことである。高校生活の途上で、自分の将来について考えたことなどまったくといってよいほどなかった。いわば、「先送り」にしていたのである。（そえゆえ、この年になつて、いよいよ真剣に考え込まざるをえなくなつてもいるのだが……）

そして、福井高校の生徒たちは中学から高校へと進学する段階で、ある程度「自分というものがどれぐらいのものであるのか」ということを、おぼろげながらも認識させられている。たとえば、彼／彼女らの口から「将来、弁護士や医者になりたい」という言葉を聞くことは、ほとんどのいではないか。いわゆる、自分の将来というものを早々に「見限っている」側面が彼／彼女らにはあるように、私には思われる。

このような生徒観を私は持っていたので、（１）「臨床哲学研究室であるがゆえに、福井高校に貢献できることは何か？」を考えたときに、すぐに頭に浮かんだのが、社会人院生をはじめ、毎週のセミナーなどに出席している、多種多様な大人たちの存在であった。臨床哲学の院生のなかには、たとえば、大学の哲学科を出たあと就職し、雑誌の編集長をしていたにもかかわらず、辞職し、また大学に戻ってきた人や、看護・教育の仕事に就きながらも、その意味を考えたて研究室にやってきた人など、人生をうつろしている人たちがたくさんいる。私はこの人たちに、福井高校の生徒たちに向かって、（２）「人生とは、けっして一直線に進むべきものでもないこと、そしてこれからの君たちには、まだたくさん選択肢があるということ」をじかに伝えてほしいと思った。そのことで、福井高校の生徒たちには、（３）「学校の外にいる人びとと出会うことをつづけて、それまでは思い描くことのなかった、未知の、そして可能な自分に出会ってほしい」と思ったのである。つまり、日頃の学校生活では出会うことのない他者と出会い、彼／彼女らの口から新たな世界について学び、その結果、これからの目指すべき自分というものに出会う——これが、私がその頃に描いていた授業の基本理念であった。

私は、個人的にこのような意図をもっていたので、当初「てつがく入門」と題していた講座名が、最終的に「出会いのてつがく」となったのを後になつて知ったときは、「これほど、似つかわしい講座名もないな」と思わずほくそ笑んだものである。

もちろん、研究室の他のメンバーのなかには「もっと、生徒に考えさせる内容にしたい。考える喜びを伝えるような授業にしたい」という異論もあるし、また、じつさいの授業内容にしても、私の（個人的な）意図どおりにはならないものが多かった。授業協力者とのより綿密なやりとりを怠ったのはコーディネータの一人（と、私は勝手にこの授業での自分の役割を位置づけていたのだけれども）として、反省すべき点であった。さらにいえば、いわゆるこちらの「持ち駒」をなるべく多く使いたいという欲もあつて、10人の生徒たちをいたずらに混乱させたのも事実である。——「みんな、たしかにめまぐるしい授業だったね。」

ひとと出会う哲学——それは10人の高校生が、社会の「人びと」と出会うことを意味していたのはもちろんのこと、（臨床）哲学が、いまどきの高校生という「ひと（他者）」と出会うことをも意味していたように思う。全25回の授業で、私たち17人の大人たちはいったい何を感じたのだろうか？

（みづらたかひろ）

大阪大学臨床哲学研究室

2002 (H.14) 年度福井高校選択科目シラバス

対象： 2 年生

科目名 出会いのてつぐく
目的 社会のいろいろな場所で生活している人たちと出会ったり、話し合ったりするなかで、学校の教科書からは学ぶことのできないものを学んでみませんか。
具体的学習内容 看護やリハビリ、マスコミ、ファッション、大学など、社会のさまざまな領域についての見聞を広めるとともに、自分たちの身の回りのことを素材にして、自分の意見を言ったり、他人の意見を聴いたりするなかで、「自分」や「他人」、「社会」についての理解を深めましょう。
その他 大阪大学臨床哲学研究室のメンバーが担当します。 実習費 500 円程度 (雑誌編集費として)
年間計画 1 学期 出会う、知ろう 看護師や理学療法士、元雑誌編集者、ラジオ番組の DJ、服飾販売員、大学の先生や学生など、「臨床哲学研究室」に集まるバラエティあふれる人たちと出会う、話し合おう。 2 学期 話して、聴こう 自分たちの身の回りの生活のこと (好きな音楽やファッション、映画、マンガ、テレビ番組など) について、みんなに話そう。また、みんなの話を聴こう。 3 学期 みんなで作ろう 1 学期、2 学期に面白いと思ったことを、もっと取材して、自分たちの雑誌を作ってみよう。



四月九日(火)

担当わした

テーマ
あいさつ
について

先週は、初めての授業ということで、あいさつ代わりにあいさつについて語り合いました。「おはよう」とか「よう」といった、だれもが毎日しているあいさつに、なにかふだん気づいてもない意味があるのか、それを考えてみようと思ったからです。

みんなにいきなり、友だちや家族や先生とふだんどんなあいさつをしているのか訊くのはばかられましたので、とにかく「他己」紹介をしてもらうために、たがいにインタビュースhattてもらいました。たぶんたがいにあまり知らないどうしだから、あいさつから入るだろうかと思ったからです。

実際には、あいさつ抜きで、せいぜい目くばせくらいで始まったようですが、みんな

あいさつについて 語りあったあとで 教室のみんなに

鷺田清一

に、どんなこと訊いたの、と詳しく訊くと、おもしろいことがいくつも見えてきました。まず、どうでもいいことや答えやすいことをあらかじめ選んで訊いていました。部活のこととか趣味についてとか。相手の性格とか悩みとか将来の夢とかについて訊いたひとはいませんでした。なぜでしょうか。たぶん、まだふたりの間柄もこれからどうなるか分からないし、たぶん授業でのつきあいだけだろうからということ、さしさわりのないことだけを選んで訊いたのだと思います。ちょこつと探りを入れることくらいはしたひともいたかもしれませんが、だれも深入りはしなかったようです。あたりまえといえはあたりまえのことです。ま

「出会いのてつがく」第一回目の授業は鷺田先生。

あいさつについて、いまどきの高校生と語り合いました。でもある生徒の「しゃべり場」みたいやなあ」という鋭いつっこみにはたじたじだったようで・・・。

だ相手にとくに関心があるわけではないのですから。関心がなければ他人に立ち入って質問をするはずはありません。

あらためて考えてみれば、挨拶にもそういうところがあるようです。朝に会ったときにちょこつとあいさつするのは、あいさつだけにしておきたいからで、それ以上突っ込んで何かを言おうと考えてではないでしょう。先生に「おはようございます」と言うときには、それ以上突っ込まれないようにという思いもきつとあるでしょう。友だちになにかあらたまって話があるときには、いきなり「ねえ、ちょっと」というふうに切り出すでしょう。

これはみんなとの議論のなかで分かったこ

とですが、あいさつにはひとつ、「他己」紹介のインタビューと違うところがあります。あいさつの場合、どうでもいいような言葉を交わすのに、しかしそれが無視されると傷つく、あるいはむしろ腹が立つということがあります。前本くんだったでしょうか、それは、存在を認めてほしいから「だ」という意見がありました。時間がなくてその発言の意味をそれ以上考えることはできませんでしたが、これはあいさつについて考えるときたいせつな点だと思いました。

あいさつは不特定のひとに向かつてなされるものではありません。いつも特定の誰かに向けられているものです。それに答えないというのは、（これは田中くんの言葉だったでしょうか）相手を「ムシる」ことです。そう、あいさつしたのに答えが返ってこないというのは、じぶんの存在がそれと認められていないということです。だから、ひとはそのとき傷ついたり、憤ったりします。

ふと思うのですが、これは携帯電話のマナーに通じるところがあるようです。他人がたとえば電車のなかで携帯電話で話しているときに不愉快に思うのはなぜでしょうか。これを考えるときにさらにもうひとつ、先に別の例を考えておきます。電車のなか

で化粧する人が増えてきました。その姿を目にして気持ちのいい人は少ないはずですね。なぜか。それは、化粧をしている人にとってじぶんは「他人」のひとりに数え入れられていないと、見る人は思い知らされるからです。電車のなかで化粧をしている人も同僚や友だちや恋人の前ではないでしょう。じぶんが関心をもっている他人の前では人は化粧しないものです。じぶんの舞台裏を見られるような気分がするからです。じぶ



んのとても不安定な状態を見られるような。逆に電車のなかでは知らない人ばかりなので、ふとあと数分後に会うひとのことを思って化粧をする。その姿を見る人は、ああじぶんはその人

にとって「他人」ですらないのだなと思いが知らされる。だから気分が悪いのでしょうか。携帯電話にも同じようなことが言えます。電話で話している人にとって「他人」とは電話の相手、つまりはじぶんの仲間だけ。まわりの人のことは眼中にない。それで無性に気分が悪くなる。いまだに携帯電話に抵抗をおぼえる人がいるのは、そういうわけでしょう。まわりの人の目を意識して、ささと隅っこに走る人には乗客はあまり目くじら立てないものです。

むかし精神科の医者さんでこんなことを言った人がいました。じぶんがだれかある他人のなかになにか意味のある場所を占めているという感覚と、じぶんがここにいてという感覚とのあいだには、深い結びつきがあるということです。他人にじぶんがその人にとっての他人として認められること、つまり（哲学者の言い方を借りると）「他者の他者」というあり方こそが「じぶん」の核をつくるということです。たとえば病気で一週間休んで、クラスに帰ってきたときにだれからも声をかけられなかったとしたら、人はじぶんはこのクラスのだれひとりにとっても意味のある存在ではないということとを思い知らされるはずです。じぶんがい

てもいなくてもどうでもいい存在と思い知らされること、これほど人を傷つけるものはありません。じぶんが意味のない存在だということになるのですから。それに似た経験を人は電車のなかでするようです。

あいさつは、そういうたがいにその存在を認めているという合図のようなものかもしれませんが。あなたに関心をもっている、という。でも、関心をもたれるというのは鬱陶しいことでもあります。親や教師のことを考えるとそう思います。だから、関心はもっているけれど、深入りしない、でももし何かあったときは、何かする用意はある、その意味ではあなたに関心はある……というメッセージを、ひとはあいさつというかたちで送りあっているのではないのでしょうか。



こういう、あいさつというかたちで安否を気づかうことを、昔の人は「問安」と呼びました。病気をして気弱になっているときに、だれかが見舞いにきてく



れるのも、ああじぶんのことを気にかけてくれる人がいると実感すること、だからうれしいの。それは他人にじぶんの存

在が尊重されていると感じることだからです。他人のなかにじぶんが何かある意味のある場所をもっているということがそれによって確認されるからです。

他人がじぶんに関心をもちすぎててもいやだけれど、ぜんぜん関心をもたれないのはもつといや、というところがあいさつに現われているのではないのでしょうか。すると、挨拶しても返事しない人はそういう関係に入ることを拒んでいるというメッセージを発していることになり、つまり他人に対してじぶんが他人になってあげるということを拒否しているわけで、そうするとこんどはじぶんのほうがもう他人としては認

められないということになり、いずれだれからも声をかけられなくなる。

こういうことが起こるからこそ、たがいに関心をもちあいながらも、密着しないで隔たりを置いておくという、そういう人とのつきあい方をするというのが、あいさつがマナーである理由なのでしょう。

「おはよう」「ゲンキーっ？」というふうに、あいさつではたしかにあまり内容のない言葉をかけます。それは、あいさつにおいては、問われていることがよりも、じぶんがだれかに問われているということそのことに意味があるからだと思われます。

最後に、他人に関心をもつということの意味について、もう少しだけ考えておきます。東京ではじめて重度障害者で都立の養護学校の教師になられた人がいます。十年ほど勤務なさって障害がさらに重くなって、二十四時間要介護の状態になられ、教職を辞せられました。それでも若い人たちに何かを「伝える」という仕事を続けたいと、じぶんのベッドサイドを学校にしようと考えられました。若い人たちを対象に、一日三交替で介護アルバイトを募集されたのです。やってきた若者たちは、バトンタッチ用に連絡帳をつけはじめました。その連絡帳が

やがて交換日記のようになり、それぞれが連絡事項以外に思ったことをいろいろ書きつけるようになりました。そのノートを読ませてもらったのですが、そのなかにとっても印象的な二つの感想がありました。

「たぶん同じことを友だちに話しても、すごく軽くとられるようなことでも、遠藤さんなら一生懸命聴いてくれるし、本気で答えてくれるし、それがうれしかったんだと思いますね。そのときは。」

「あなたが言語障害をもってよかったと思う。一言一言を聞き漏らすまいと、耳を傾けることができるから。あなたが生まれてきてよかった。」

この二つの感想は、一見反対のように見えます。聴いてもらえてよかった、と、聴くことができてよかった、と。これは、ひとは他人に関心をもたれることで生きることができると同時に、他人に関

心をもつことで生きる

力を得ることもあると

いうことを教えてくれ

ています。他人の境涯

に関心を持ち、それに

コミットしていくこと

で、じぶんがその人に

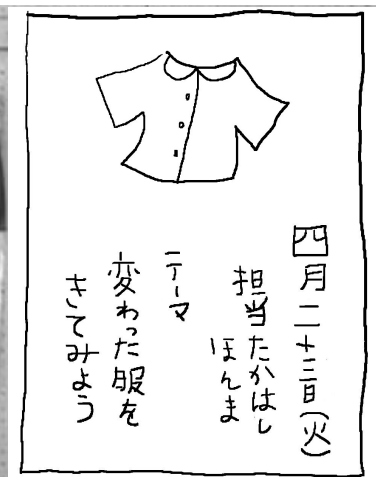


とって意味のある存在になる……。そのことで、先ほどの哲学者の言葉を用いると、「他者の他者」としてのじぶんの存在を確認できる、ということですね。福井高校ではボランティアに取り組んでいる人も多いと聞きますが、ボランティアに行くことの意味もきつとそういうところにあるのではないかと思います。

わたしたちは気心知れた人とのコミュニケーションはなかなか繊細で上手いですが（家族ではあいさつしなくても別のこまやかなメッセージを送っているのでしょう）、気心知れない人とのコミュニケーションはあまり上手くありません。社会生活とはいってもでもなく気心知れない人といつしよに暮らしていくということですね。気の合わない人ともいつしよにやっていくということですね。友だちや家族とだけいつしよにやっていくわけではないのです。そのとき重要なのは、もたれあわないけれど、しかしながいに関心はもっているという、ちよつと距離を置いたしかたがいの境涯を気づかいあう関係なのではないでしょうか。そういうスタンスで生きているという信号として、あいさつがあるように思います。よその会社の受付を通るときにも、ホテルのフロン

トでチェックアウトの朝に「おはようございます」とか「ありがとうございました」などと言うのも、あいさつがそういう気心の知れない人といつしよにやっていくという、社会のもつとも基本のマナーになっているからだと思います。（わしだきよかず）





4月23日 変わった服を着てみよう(本間+高橋)

とりあえず高校生にわかるように「変わった服を着てみよう」とタイトルをつけてみたが、この回では(難しく言えば)衣服を他人との関係や自己関係のメディアとして捉え、具体的にどんな服を着るかということ「他人への関わりかたや自分(の見た目、自己イメージ)とどんな関係をとるかということについて生徒達に考えるきっかけを持ってもらおうと考えていた。また衣服が単なる個人の選択には留まらず、社会とのつながりを持つということ、とくに衣服が「ジェンダー」、男らしさ、女らしさとの関わりを持つということについて、具体的な事例 講師がなぜこんな「変わった」服を着るようになったかというちょっと恥ずかしい??経験談 を通して、すこしでも気づいてもらえれば、という思いもあった。

その前の回(鷲田+百々)では服について生徒にいろいろ話してもらったが、自分の考えることについてみんなの前で話すということが想像以上に生徒達にとっては大変なことだったので、今回は(生徒に発言をさせる方式ではなく)話し手自身の経験を服を見せつつ話すという形式にしてみた。あとは彼らに実際に服を着てもらおうというのがメインの課題で、それもいろいろ言葉で考えるよりも、実際に「変わった」服を着てもらっただけなら、それほど難しいことではないし、じかに感覚で感じてもらえるかな、という程度のことをもくろんだものだった。

服がつり下げられるということで体育館を借り、高橋、本間両名が(研究室の卒業生で、我々の愛好する某ブランドに就職なさった栗山さんの協力も得て→栗山さんありがとうございました)授業の構成は、いろいろへんてこな服

を生徒達の前にフリマのように広げてはつり下げるとい
 パフォーマンスをつかみとして、希望する生徒にその服を
 実際に来てもらい、その後は本間、高橋による「私はなぜ
 変わった服を着るようになったか」話をそれぞれ十五分程
 度。こう書くとかかなりふざけた（マニアックな？）企画だ
 が、我々講師二人は上のようなテーマのもと、「ジェン
 ダー」というテーマを高校生の彼ら自身に関係あることと
 して身近に感じてもらうには、話し手（講師）が彼らと同
 じ年齢くらいの頃からどんなことを考え、どんな服を選ん
 だかという「ストーリー」として聞いてもらうのが一番い
 いのではないかと、ということをそれなりに真剣に考えてい
 たつもりである。

持ち込まれた服にも、感嘆というよりは奇異なものをみ
 る眼差しが注がれていたようにも思うが、一応いろいろ見
 入っており、話も（予想よりは）まあまあ聞いてもらえた。
 話し手の感触としては、一部の人の視線にはうつすら触
 れ、残りの人も自分とそんなに遠い話ではないのかな程度
 には聞いていたなあ、というところ。服を実際に着てみよ



うというこちらからの呼びかけに関してはのりのいい男子
 数名が反応し、お互いに冷やかしながら高橋の袴風パンツ
 や、本間持参のインドネシアの民族衣装など（一似合っ
 ていたが男子諸君は巻きスカートなのでいやがる）を着てい
 た。女子は関心は少しはあるようだったが、恥ずかしさが
 先に立つようで嫌がった。（企画者の中には「生徒に強制
 的に服を着せる」ということに抵抗を持った人もいたよう
 だったが）私としては着ることを勧めはしたが、嫌がる生
 徒には強くは言わなかったし、やっぱり恥ずかしがるか、
 という程度。

高校生にワードローブを（頼まれてもいないのに）公開
 し、自分がなぜこの服を気に入っているかを彼らに分かっ
 てもらえるように話すというこの奇妙な経験についてはい
 ろいろ考えたことはあったと思うのだが、今回のメインの
 課題である「ジェンダー」に対する感覚、意識）を衣服を
 教材として伝えるということがうまくいったかどうかにつ
 いてだけ簡単に振り返っておく。



高校生くらいの年代の人に接することが多い某研究室関係者（田中さんです）からは、今回の話に多く登場した、コムデギャルソンなどの服は、思想性が強いので高校生には難解だろうというような御指摘をいただいた。これに関しては私は自身は「既存の女性性への抵抗」というような物言いまでいってしまうと確かに難解だけれども、私たちが実際に服を選ぶときには、女の人でもパンツしかはかかないとか、知らず知らずにフリフリのものばかり選んでいるというように、感覚の中に込められた方針のようなものがあるし、女、男らしさへの違和感（あるいは執着）みたいなものを感覚レベルで理解したり、伝えることはできると考えている。そもそもそうしたものへの違和感（や執着）はそもそも感覚レベルで起こっているはずであり、その感覚を解きほぐしていくなかで「ジェンダー」という概念も初めて姿を現すのではないかだろう。

「ジェンダー」に対する感覚、意識）について学生達に考えてもらう教材としての衣服を用いるということに関しては、もつと戦略を練って「ストーリー」を作り丁寧に説明すること、相手を引き込む話術があれば、ある程度は有効な教材として使えるのではないかと考えている。（高校生ではないが、私が他のところで行った専門学校生相手の授業では、わりと使えると感じた。）

ただ「若者だからファッションに関心あるだろ」というような安易な思いこみではうまくいかないということも同時に感じた。（前述の某関係者、田中氏からの指摘にはこれ以下のポイントに関係するところもあると思われる。）学生の中には服なんてべつにどうでもいい、楽だったらいですという意見も多くあったし、女らしさや男らしさにあまり疑問を抱かないという保守的な？マジョリティーにくみする？考え方の人も多かったように思う。

（余談だが、専門学校生の授業の感想から見て、服に込められたジェンダー的なものを批判的に取り出すことは、一部の女子学生には比較的簡単だが、男子生徒にはさらに難しいようだった。そもそも女性の方が見られている自分というのを普段から意識しやすいし、男性は多くの人がそのようなことを強いられない？ということと理解度が若干性別によって偏るのかもしれない。）

高校生に限らず、自分よりも年下の学生にジェンダーの話をするときにつくづく感じるのは「男らしさや女らしさに抵抗を覚える」というのはまだまだ（というかどうかんな時代でも）マイナーな発想なのだなあ、ということである。ということとはつまり、「男らしさや女らしさに抵抗を覚える」とか、「一般的な身体の美的基準で測られるのはおかしい」といった発言は、理解しがたい、奇妙なものとして半数がそれ以上の生徒に受け取られる可能性があるということであり、うまくいけば「へえ、そんな考えたもあるのか」ということになるが、失敗すれば「そんな風に考えたことないし」とつっぱねられるか、こちらの一方的な道徳的お説教になってしまうということである。

それとは違う考え方もあるということをどうやって理解してもらえるのだろう　福井高校の授業から、私に与えられた宿題は、いわゆる「既存の枠組み」にそれほど抵抗を感じないまま大きくなり、自分と違う考え方をする他者にあまり出会った経験のない学生達たちにマイノリティ（社会全体にとっての他者？）の考え方（フェミニズムや障害学など）を伝える方法を考えるということである。

そもそも、マイノリティの考え方を理解するとはどういうことなのか。なぜマイノリティの考え方を彼らに伝えなければならぬのか。これに関して今私が思いつく答えは

一つしかない。それはマイノリティ（他者）の考え方を理解することは、ちがうやり方で考え、生きている他人を（無視、拒絶するのではなく）理解できる態度を身につけるということであり、私は他者を理解する態度を身につけるといふことが生徒達が社会で生きていく上で必要だと考えるからである。

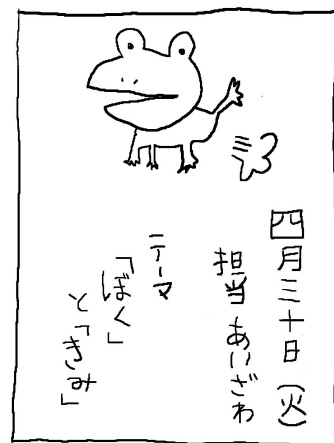
学校、授業といった枠組みのなかで「他者に出会う」ということがどれだけ実現できるか、というのはこの福井高校プロジェクト自体の課題であると思うが、（衣服など魅力的な教材を工夫すること、対話技法の導入などを含めて）それが生徒達にとって苦痛でない形で、楽しく実現できる方法をなんとか考えてみたい。（たかはしあや）



「着なさい」と「着てみよう」のあいだ

本間直樹

服装について言及したり、言及されたり、「着なさい」と言われることというのはとてもデリケートな事柄だ。自分が他人にどのように見られているかということにセンシティブなのは自然なこと。そこに教室という場所とコンテキストが加わるとなおさらだろう。学校という空間は「着てみよう」を「着なさい」に変換する。さもなくば「先生」とすら見なされないし、「無視」で応接される。それを実感した。人によっては「先生」をうまく演じきってこの変換を見えなくする。それは必要なことだ。だが哲学はどうなのだろう？（ほんまなおき）



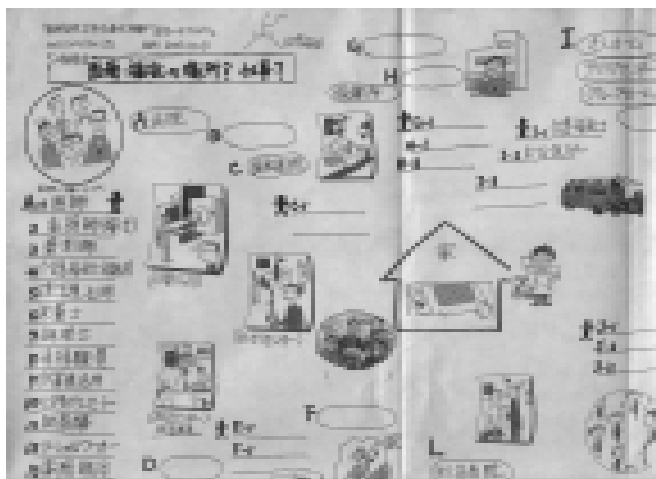
5 時間目 医療・福祉の場所？仕事？

次週より理学療法士や看護師、介護士の人たちが来て、人の誕生や性、障害、老い、死について授業をすることになっているので、その前に医療・福祉の領域と職業について概観し、その広さと多様さに気付いておいてほしいと意図して、この授業を行った。

授業では、医療・福祉の場所と職業についてイラスト入りで穴埋め形式にまとめたプリントを用意し、場所と職業について思いつくものを挙げていってもらい、その間に関連の説明や話題を挟んだ。順に当てて答えてもらったのだが、二、三順目くらいから考えるのをやめて、寝たり、黒板に書き出された答をただ写そうという生徒たちが出てきた。それでも人間ドックのイラストがコインランドリーに似ているとの指摘や、人間ドックは「ドック(dock)」か「ドック(dock)」と質問が出たり、「医師」との答えを期待したところに「院長」との答えが出たり、いくつかの思わぬことに戸惑いつつ感心した。またこの4月から「看護婦」から「看護師」に職名が変わったことを知っている生徒もいた。私が見学したことのある

る養護施設についてパンフレットを見せて言及したときには、さっと集中してくれたが、私自身がうまく突っこめずせっかくのチャンスを逃してしまっただ。答の穴をいくつも埋められないまま残して、最後にこの授業の意図を口頭で説明して授業を終えた。

反省点として、答えてもらう穴をもっと絞る必要があるとわかったし、この授業のまとめを書く欄をプリントに設けて少し考えてもらう時間を取り、「医療・福祉の場所はあちこち広い。そしていろんな仕事がある。」などと書かせるのも、授業の意図を知らせるのによいと思う。さらにテーマにあまり関心のない生徒たちの興味を引くもの(例えばクイズ的なイラスト)をもっとあればと思う。また同様の授業をする機会があればこれらの点を改善したい。



6 時間目 「ぼく」？「きみ」？——『かんがえるカエルくん』を読もう

『かんがえるカエルくん』(いわむらかずお作 福音館書店、1999年)のなかの「ぼく」というお話は、カエルくんがネズミくんと一緒に「ぼく」と「きみ」について考える哲学的な作品である。言葉も4コマ仕立てで進む絵も、とてもシンプルで工夫されている。しかし内容をあらためて理解しようとするときくわからなくなり、途方にくれるほどだ。この本を授業で一緒に読んでみたい、どんな反応をしてくれるだろうかと思い、授業を試みた。

作品「ぼく」は、「ぼく」と「きみ」とは何かという問いと、「ぼく」と「きみ」の表現の多様性(例えば「わたし」と「あなた」や、「せっしや」と「おぬし」)についての問いとの二つを含んでいる。一通り読むことも考えたが、それは無理だと授業案の検討会でアドバイスされ、前者の問いの場面に絞った。また内容理解のために、場面を分けて内容を要約するプリントを作った。これも指示が伝わりにくくまた難しく生徒たちがどうすればよいかわからないと検討会で指摘された。しかしよい改善策がわからず、結局プリントには「絵本で言われていることを、自分で下に書いてみよう。」と指示した。さらに全体用に絵本の場面を二倍に拡大カラーコピーしたものと、要約時に手元に配るコピーを用意し、読む練習もした。

当日は、絵を広げると生徒たちは興味を持って見ていた。しかし要約についてはやはりなかなか指示が伝わらず苦労した。それでも、例えば、カエルく



んは『ぼく』であるとか、とにかく何か自分でまててみて。」など何度も説明すると、取り組んでくれ、うまくまとまらない答えもあったが、よくできたものもあった。二つに分けた場面について場面ごとに二人ほど自分のまともを読み上げてもらい黒板に書き出し、簡単に検討して、要約を確認した。私が押さえたかった作品の内容は、第一場面では「カエルくんもネズミくんも『ぼく』であり、『きみ』である。また、『きみ』と呼びかけると相手は『ぼく』であり、『ぼく』ということは相手に『きみ』と認め

られることである。」第二場面では、「ぼくがいるから（いてはじめて）、きみがいる。そしてぼくは、きみがいるから（いてはじめて）、きみのきみになる。（つまり、ぼくは一人ではきみになれない。）さらに、ぼくはきみと呼ばれなければ、ぼくになれないのではないか。（つまり、ぼくは、きみのきみとしてはじめて、ぼくなのではないか。）」であった。しかし第二場面の途中で避難訓練が始まり、授業は中断となった。（避難訓練があることは授業のはじめに生徒たちが教えてくれたが、その開始時間はわからなかった。）授業をまとめようとして、『きみ』や『ぼく』、『わたし』や『あなた』って、普段は当たり前で意識していないけど、不思議だね。」と言いながら、いや今はそのような場合ではなくすぐ避難訓練をすべきだと気付く。私も生徒たちと一緒に避難訓練をしたが、教務手帳を教室に置き忘れた。素早い判断力や学校の先生としての生徒への責任について思わず反省させられた。（なお集会時に生徒たちが静かに並んでいたことにも感心した。先生たちの指導が上手なのだろう。）

授業は途中になったが、プリントの最後に「感想（読んでどんな感じがしましたか？ 授業はどうでしたか？）」の欄を設けておいたところ、「難しかった」「よくわからなかった」というのとともに、「別に全々（？）意識していなかったけどよく考えたら不思議でおもしろかった。」と書いてくれた生徒もいた。「てつがくのだと思った。」というのも。次回の授業の冒頭を借りてあらためて私がこの授業で伝えたかったことを述べた。つまり、みなそれぞれ「わたし」であり「あなた」であるというのは当たり前だけど、あらためて考えると不思議で驚きを感じ、それを一緒に感じたかったこと。そして、「出会いの

てつがく」のどのテーマでも社会生活のどの場面でも、きつとみながそれぞれ「わたし」であり、「あなた」であること、言い換えると、人がいて自分があり、自分がいて人がいることを、少し意識してみてほしかったこと。私が話しているとき、生徒たちは一方でしゃべりながら、もう一方で聞いていたのだろうか。「わたし」と「あなた」という当たり前のことに、何か本質的なことがありそうだと感じてもらえたら良かった。

実際に授業をしてみて、プリントの改善点もわかった。場面をさらに分け、いくつかの場面はあらかじめ要約を付けておくことで、要約の仕方を例示する。そして最も考えてほしい点を絞ってそこだけ要約してもらう。また、もっと時間をかけてこの作品を読むこともできるかもしれない。各自の要約を互いに確認し、理解しあいながら、共同で作品の要約と理解を磨き上げていく。これができるれば、この作品を媒介として哲学的な対話ができるのではないか。

（あいざわくにこ）



車椅子に乗ってみよう 玉地雅浩

リハビリテーションの概念や理学療法士の仕事をまず説明した。次に、車椅子に関する基礎知識や取り扱い方、平地、坂道や段差での操作の仕方、障害はどのような場面で生まれるのか等を質問を交えながら説明した。その後、校外に出て実際に車椅子を自分でこいだり、人に押してもらうなかで具体的に困った事を挙げてもらい、車椅子で街中を移動する難しさを実感してもらうことにした。今回は車椅子での移動時の困難さに焦点をあてたが、少しでも身体に変化が生じた時には当たり前で過ごしている環境も、作った人はある基準を基にして作っているために、上手く適応できない人には大きな障害となる可能性がある事を想像してもらえ、事を目標とした。

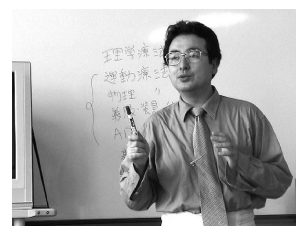
生徒さんの反応

授業では生徒さんのなかには、以前に学校が開いた車椅子の介助の仕方を希望者して習っていた人もいたため、車椅子に慣れている学生さんもいた。そして今回の授業では、学校の車椅子を使用した為にタイプも限られていた。そこで、もっと最新式の車椅子やテレビドラマで登場した物を借りるなどして新鮮味をもたせてもよかったと思う。それは今まで車椅子は移動手段としての目的だけが追求されてきたが、最近は座って仕事をしたり家事をするなど生活上で座るための機能がより追求されているからである。そのため快適性やデザインや椅子としての機能が求められている。車椅子に求められているものが変化しているということはそれを使う人の意識も変化している。それに我々は気付いているかをもっと強調できれば反応も違ったものになったかもしれない。

校外での体験は少し生徒さんが遊びたい気持ちを抑えがたい様に私には感じた。歩道の形や段差、溝やミラ-の高さ、坂道の角度など、作った時にはそれぞれ目的や基準があるが、全ての人に役立つ物にはなっていないし、時には障害となることを体験してほしかった。しかし、このような事は最近は見聞きする事も増え何となく知っていたり、想像できるため、体験しなくても考えたら分ることと学生さんは捉えていたのかもしれない。

反省

以上の事を踏まえて、反省としてはもっとダイレクトな障害体験をしてもらった方がよかったかもしれない。例えば、体をほう帯で固定したままで車椅子にすわって介助されるといかに介助する人もされる人も動きを制動できないか、或いは、脚が動かない状態で松葉づえを歩いてみる。視覚が制限されると我々はどうのような肢位をとったり歩き方になるかを皆で体験しても良かったと考える。具体的なイメージを浮びやすくするために患者さんに了解をとってビデオで撮らせてもらおうかと迷った。患者さん達はおそらく主旨を説明すれば協力してくれるだろうが、今回は色々と考え見送った。（たまちまさひろ）



五月十四日(火)
担当 たまち
テーマ
車椅子に
乗ってみよう





五月二十八日(火)
担当みうら
テーマ
生徒の
意見を
きく

生徒の意見をきいてみる

三浦隆宏

中間考査(5/20 - 24)のため、一週間あいたこともあって、このあたりでいちど「生徒の意見を聴いてみたい」と思い、おこなった授業。5限目で「これまでについて」を振りかえり、6限目では「これからについて」生徒の要望を聴こうとした。

「さあみんな、意見を言ってごらん」と言ったところで、元気な返事が返ってくるわけではないことは、これまでの経過から学習していたので、アンケート用紙にまず記入してもらったうえで、それをもとにして私と生徒とのあいだで言葉のやりとりをしようという作戦をとった。

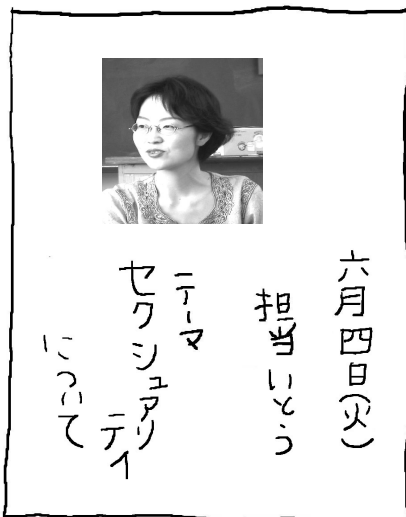
「いちばん印象に残った授業」では、神戸ファッション美術館の百々(もも)さんの授業と、理学療法士の玉地さんの授業を挙げる生徒が多かったが、前者は百々さんの名前とその風貌が、また、後者は「車いすに乗った」ということよりも、ただ単に学校の外をうろちょろできたというのが、その理由だろうとも思う。

授業の感想として、「英語とかよりぜったいいい」「けっこう話したりもできておもしろいと思う」「ゲストが多いのが良い」という好意的なものもあれば、「難しい」「ぜんぜん出会えなかった。もっとおもしろくしてほしい&話ばかりはイヤ!」「ねむくなる」「しずかでしんどい、もっとうごいていろいろしたい。しゃべっている時間がながい」「思った感じと違うかった。もっとわかい人とか色々会いたい」という、なかなか耳が痛いものも言ってくれた。(残念ながら、この素直な生徒の意見を契機に、それ以後の授業がよりよく改善されたかどうかは心もとない。)

また、ちょうど5/17の全体会で、福井高校での取り組みについて報告する機会があり、そのときの「映像資料」としてまとめた、過去5回分の撮影ビデオを生徒に見てもらったのだが、これが大不評。あわせて、さきのアンケートにおいても「ビデオいらん」「ビデオさつえいをやめてほしいッス」など、それまでに授業の風景をビデオ撮影していたことにたいする不満を表明する生徒もいた。(なお、ビデオ撮影にかんしては、最初の授業の日に「こちら側の勉強のために必要である」旨を本間さんが説明し、いちおう生徒の承諾を得たということになっていた。)

私じしん、ビデオ撮影は不要だと思っていたので、さっそくその週の分科会でビデオ撮影の中止を提案したのだが、「この授業をより良くしていくための材料として必要」とのつよい異論もあって、話しあいには紛糾する始末。結局、6/4に「ビデオ撮影についての確認」をあらためて生徒にとり、とりあえず授業担当者のみを撮影する(つまり、生徒の姿は写さない)ということでいちおう決着したのだが、さきの分科会において私は、かなり感情の揺らいだ姿をメンバーに見せてしまったこともあって、このあたりのことは、個人的にあまり思い出したくない出来事である。

(みうらたかひろ)



性の多様性について

伊藤さんが伝えたかったこと

芦原病院で看護師をなさっている伊藤悠子さんは、産婦人科で若いお母さん達の手助けをする一方で、さまざまなセクシュアリティを持つ人々を支える活動をされています。伊藤さんは、福井高校の生徒達に性の多様性についてご自分の経験を交えてお話をしてくれました。生徒達の質問・感想に対して伊藤さんからこんなお返事をいただきました。

福井高校のみなさん、こんにちは。

先日「であいのてつがく」でお会いした、看護婦の伊藤悠子です。

授業では、不慣れな講師にもかかわらず話を熱心に聴いてくださって、うれしかったです。どうもありがとうございました。

アンケートもしっかり書いてくださいましたので、ひとりひとりの意見を読ませていただいて、お返事がしたくなりました。どなたが書いてくださったかは分かりませんので、「みなさんに」ということで、読んでくださいね。

“ いろんな専門用語があってむずかったと思ったりした。”

→ そうですねー。性の決定には4段階もあって、それぞれ連続している、ということの説明する部分が長かったですね。

プリントとか、読むものの量が多いのを避けようとして、かえって集中するのに疲れてしまったのでは・・・と反省しました。ごめんね。

“ 性同一性障害というのはむずかしい問題なんだなぁーと思った。”

性にはいろいろなことがあるのがわかった。”

→ そうそう、どんなセクシュアリティの人も、自分が主人公ですよ。

“ いろんな人がおるんやと思った。”

→ それが伝わったのはうれしいです。さまざまな性自認(私って何者?) 多様な性指向(男が好き、女が好き、その他 etc.)それをどう生きるか、選択も様々。自分や相手が互いによいと思えることなら、何だってアリ



“ 性転換手術と他の性(中間?)についての話 ”

→ この意見すごい、って思ったのは(中間?)としてあるトコロ。

もしかしたら、男女がクリアにふたつに分かれているのではない、と私が言ったので、「それなら中間、というのもおかしいかも?」って考えてくれたのかなあ。



“ 性転換の手術がむずかしいなんてしなかったし、たくさん性転換をのそん

でいるとは知らなかったのがそれが印象にのこった。”

→ かつては「性転換手術」と呼ばれていたのが、現在は『性別適合手術』と改められています(たとえば、女から男になる、とかいうのではなくて本人にしたら、本来の自分の性に戻る、という意識だろうと。)

手術は一度では済まなくて、何段階もあるので、最終的な完了までに年数もかかってしまいます。だから、できるだけ早く手術を始めたいのです。

“性転換手術が中止になったこと”

→ 自分たちがやりたい手術だったら、研究材料として扱うのに、人の人生の幸福や苦しみには関心がないっていう研究者(医者)は本当に困りますね。

“せつかく精神療法とか終わって手術を待っているも倫理会での承認がなくて待たされているというのを聞いて、おかしい話だと思った。”

→ それでなくても、日本では公に手術をするといっている大学病院は岡山と埼玉医大しかないのに、そこがストップしてしまったら、待っている人にしたら絶望的ですよね。

海外で生活しながら手術ができる人なんて限られてるし、そうなるとヤミで手術するか、自分の一生を本当の意味でスタートすることを、あきらめるしかないのでしょうか・・・



“新聞を読んで、手術をして、二人も死んでたなんて知らなかったびっくりした。”

→ 亡くなられた方や、そのご家族はどんなに無念だったか・・・と胸が苦しくなりますが、あの記事は氷山の一角で、報道されない事故も、実際にはいっぱいあると思います。でも、「恥ずかしいこと」とか「隠すこと」と思われているのをいいことに、裁判にもならず、警察に通報もされず、闇に葬られたり、内密に収められてしまうことがほとんどかもしれません。

“クリニックは小用(信用)できないと思った。”

→ この手術にはたいへんな時間と費用がかかります。病名が付いての手術は保険が使えて3割負担なのですが、美容整形だと、保険は利かず10割全額負担であるばかりか、技術的にも未熟だったり、後のケアができないところも多く、そういう場合は泣き寝入りになってしまいます。

“性同一性障害

障害なんてすか?? 障害ってどういう意味ですか?? ”

→ 今までに、いろんな勉強を身につけて来られたんですねー。

この問い、というか意見は「性同一性障害」の、そして自分そのものである、性と生存の権利【セクシュアル・ライツ】の本質を突いている、と低、いましたよ



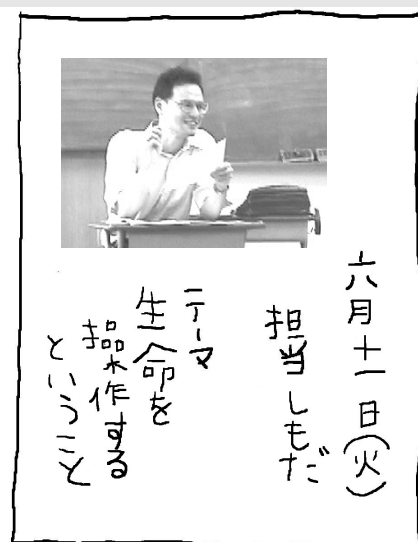
どんな当事者にとっても、しぶん自身のかけがえのない、ありのままの性(セクシュアリティ)であるのだから、何で「障害」なんてくり方をするのか? 変ですよ。

障害なのは、生き難くしている社会の側じゃないか、ってわたしは感じています。「みんな」にとっての「普通」「あたりまえ」って一体何なのか、その前提を疑わない鈍感さによって傷つくのよ、つて思っちゃうんだよね。

ということで、あっという間の時間でしたが、みなさんと会えてホントウに嬉しかったです。今でも一人ひとりの顔が浮かんできます。ありがとう。性に関する質問や相談などがあれば、いつでも連絡してください。

では、お元気で。

伊藤悠子。(いとうゆうこ)



授業風景のビデオなど事前に与えられていたいくつかの情報から、おおよそのイメージを描いていたものの、実際に生徒たちがどういう反応を示すかは予想できなかった。「出たところ勝負でいいか」というのが正直なところだったと言ってもよい。

「生命操作」などという、高校生にとっておよそ身近な問題として考える機会もなければ、考えてみる動機も見つかりそうもないテーマを選んだのも、とくに明確な理由があったわけではない。これまでにいくつかの大学で少人数（20人くらい）のセミナーを受け持ち、「現代社会が直面する諸問題」ということであるいろいろなトピックを取り上げた際、比較的学生たちが興味を持って自分の意見を話すのが主に「生命倫理」に関する話題のときだったという経験がある。そのことはたしかに一

つの理由だったかもしれない。「なんだかよく分からないけど、世の中にはこんなこともあるのか」というくらいの関心を示す生徒が少しはいてくれるだろう、というのがこちらのささやかな期待であった。

授業の中で使用したのは、インターネット上でビジネスとして展開されている「精子バンク」と「クローン人間づくり」のウェブサイトのページ、そしてそれらに関連する特集番組のビデオである。前半は、日本国内においてインターネット上で精子バンクのビジネスを行っている「エクセレンス」というサイトと、新興宗教団体「ラエリアン・ムーブメント」が実質的な運営主体である「クローンエイド」のサイトから、それぞれ主なページをプリントアウトしたものを資料として配付し、それについて説明を加えながら、生徒から質問や感想を受けるという形で進めた。

当初の予想通りと言っているのか、「なんだこれは」といった若干の興味を伴う反応を示す生徒と、「どうでもいいや」という感じの無反応に近い生徒とに分かれたようだ。「何か質問は?」「どういう想を持った?」といった、自由に発言を求める問いかけに応答してもらえ可能性はおそらくないだろうというこちらの「決めつけ」が、生徒の側にも伝わっていたのかもしれない。指名されない限り口を開く

ことはほとんどないし、指名されてもぼそつと言答えるか押し黙ったまま下を向いている、というような状況だった。

とりあえず何か話してもらわないことには進まないで、無理矢理に意見を言わせるということになる。となり同士で質問内容について話しているということも何度かあったが、とにかく興味を抱いてもらうことが大事だろうと思い、しばらくザワザワすることも放任した。「沈黙に耐えられない」というよりむしろ「せつかち」な性分から、生徒が黙り続けていると、何とか答えやすいようにと次々に質問を変えていくおせっかいな教師を前に、生徒たちますます息苦しくなっていくようだった。長年教えるという仕事（塾、予備校を含めて）に従事してきたものの、こうした重苦しい事態を打開する力量に乏しいため、ひたすら時間が過ぎるのを待つという「空気」の中でほとんどなす術がない。

後半のビデオ鑑賞のときにも、集中して見ていという状態ではなかったものの、ときどき「へえー」という感じでおもしろがっていることもあった。その後クローン人間づくりに関するアンケートを書かせて、その内容を口頭で話してもらった。それまでの経緯からやや意外だったのだが、それぞれ自分なりに考えている様子がうかがえたのでほっとしたのを記憶している。

得体の知れないもの との「出会い」？ 霜田求

「大学の先生」がやってきて「生命操作」というテーマで梅雨空のうつつとしい日に行われた授業、――それが、生徒たちにとって非日常の世界から出現してきた得体の知れないものとの「出会い」になったのだろうか、今もってよく分からない。

（しもだもとむ）

私が福井高校で したこと、考えたこと

中岡成文

6月25日に福井高校に出かけた。2週間続けて授業を担当する予定だったが、高校の催しのため1週はつぶれてしまった。

授業をやる側（ふつうは教師だが）からすると、とくに男子生徒たちの間で私語が多いのはやはり気になる。もっとも、「好きなところに座っていいよ」と最初に言ったのは私自身で、これが私語の温床になったかもしれない。そこで、やり方を転換した。休憩時間が終わり、授業が再開されたとき、「言いたいことがあったら、気の合った者同士の私語として言うのではなく、みんなに向けて言う」ように、強く生徒たちに要請したのである。これは大切なことだと思った。私語の仲間に入れない生徒が疎外されることを避ける、教室全体のコミュニケーションを確保するというねらいもある。

私の授業は次のように構成されていた。目的は、「学校とは何をするとするか」について考えてもらうことである。次のいくつかの問いを生徒に出し、一人ずつ答えてもらった。各自A4の紙に自分の答えを書き、それを持って順次前に出て、読み上げてもらうのである。そのとき、私の方から発表者に簡単な質問をして、押し出しの弱い生徒をプッシュしたり、気づきにくいポイントを確認したりした。私の出した問いは、1.「学校でできる好きなこと」、2.「学校でやられるいやなこと」、3.「学校以外でできる好きなこと」、4.（2.の「学校でやられるいやなこと」に対する自分自身の答えを振り返り）「なぜいやなのか」である。

「学校でできる好きなこと」は、部活や友達としゃべることだという答えが多かった。

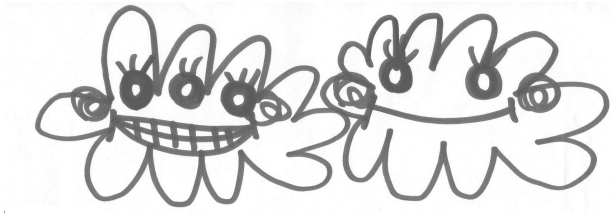
ある生徒は「部活」と縦書きし、周りに温泉マークなどさまざまな図形を書き添えていた。図形的な表現もきっと大切なのだろうが、私にはうまく受けとめられなかった。ずいぶん迷ったあと、「今のところ授業中……?（友達がいたら友達と話している時間だと思う?）」と書いた生徒もあって、この煮え切らないように見える言い方のおかげでいろいろ考えていることは、質問してみるとわかった。

「学校でやられるいやなこと」への答え。「学力主義とかいやなじゅ



六月二十五日（火）
担当 なかおか
テーマ
学校の好きなこと、
やられるいやなこと





学校とは 何をする ところか



ぎょうとか。」「1.人とかかわること(体育でチームを組んだり、調理実習などなど...)2.ある人(イヤな人)にからまれること。3.定期テスト(これはしょうがない...)。」「レポート書かされる。」「感想文を書かされる時。→それを読まれるとき そうじ。」「陸上 勉強できない人をばかにする教師。」「器械体操はイヤ 携たい電話持ってるって自慢する奴がイヤ」(2つの「イヤ」の右上に怒っているしるし)。

「学校以外でできる好きなこと」軽音楽クラブの男子が複数いるせいか、音楽、テレビ、寝ることという答えがとても多かった。ある生徒は、縦に大きく「睡眠」と書き、その2字の間に横書きで、「てれびにつきる」と書く。あとは四辺に「ねるねるねるねる.....」とずっと書き連ねてある。他の答えでは、全面に大きく「TV」、その後小さく「がみれる」、「あとねれる、音楽をきく、ハジケれる」とあった。「ハジケれる」の意味を尋ねたがはっきりしなかった。生徒たちには通じているらしい。

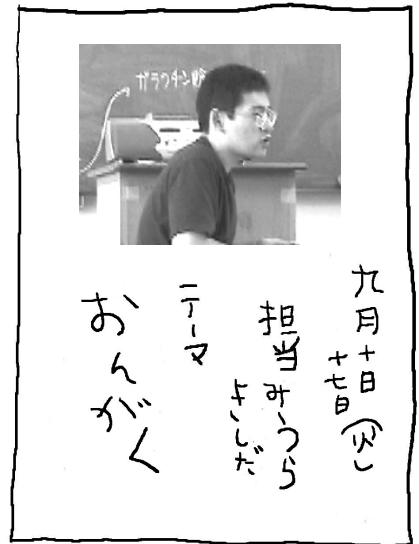
「学校でやらされるいやなこと」はなぜいやなのか。「せいのり的[横の生徒に漢字を尋ねていたがわからなかったらしい]にうけつけないから かにさわるから。」「人生 勉強できてもあんまりこのごろ関係ないから!! 勉強しかできないやつのほうがアホやと思う。!!!!!!」と書いた調子だった。

もともとは、哲学的な対話方法論・グループワークであるソクラティック・ダイアログ(SD)をやりたいかった。「学校とは何をするところか」というテーマのもとに、大学の共通教育でSDタイプの授業をやっているの、それと似たことができるかなと思っていた。しかし大学生のような集中力とコミュニケーション能力を高校生に期待するのはむりだと忠告された。それで具体性や参加性を強めるために、A4の紙に各自で答え(や絵)を書いてもらい.....という上述の手法を取り入れることにしたのである。このねらいはかなり当たり、生徒の率直な表現を引き出せたと思っている。それを深め、「学校とは何をするところか」というテーマを考察するところまでは行かなかったのは事実であるが、ともあれこのような場をコーディネートしてくれた、会沢さん、高橋さん、三浦君に感謝したい。

(なかおかなりふみ)



イラスト
生徒による
(授業中の
プリント)



「音楽をみんなで聴こう」

三浦隆宏

音楽という、いわば共通のmediumを介して、私と生徒とのあいだで、また生徒どうしのあいだで、話して、聴くという、ことばのやりとりができればいいなと思いい、おこなった授業。(幸いにも、音楽を聴くのはきらいだという生徒はいなかった。)

生徒にはあらかじめの口 もしくはメモを持ってきてもらい、自分が聴きたい曲、もしくはみんなに聴かせたい曲を再生してもらおう。そして、私がその生徒に「その曲のどういったところが好きなの?」「そのアーティストの曲でほかにも好きなの?」などといういろいろ尋ね、答えてもらう。そのことで、自分の思いを他人に伝えることのむずかしさを実感するとともに、他の生徒の意

岸田 智

音楽雑誌の編集者をしていたという社会人経験を生かして、福井高での今回の授業では、「音楽を聴く」というテーマで二学期に2回、小冊子を編集する」というテーマで二・三学期あわせて7回の、計9回の授業を担当した。

二期の「音楽を聴く」に関しては、2回分の授業の目標を「好きな音楽を素材に自由に話し合う」といったところに大まかに設定し、まず1回目の授業で、生徒たちに普段好きで聴いている音楽を教室に持ち寄ってもらい、互いに聞き比べをしながら印象を述べたり意見交換を試み、2回目に今度は講師の岸田の方から、音楽を語るにはこのような方法もあるという1つのサンプルを、実際の曲を使って示そうと考えた。クラスには軽音楽部に在籍している生徒が何人かいるとの事前情報もあったので、音楽について活発な話し合いができるのではないかと考えていた。

実際の授業は、だが、こちらの思惑通りにはなかなか進まなかったと言える。生徒はめいめい

自分の好きな音楽を持ってきてくれたが、順番に自分の曲をかけて簡単に曲の説明をし、岸田や他の阪大メンバーと2、3やりとりをした後は、他の生徒が持ってきた曲に関して、隣に座っている仲のいい友人と仲間内の会話をすることはあっても、クラス全体に対して自分の印象や意見を発言することはなかった。生徒の口は少な



見を聴くことによって、その生徒の新たな一面をも発見してもらいたいと思ったわけである。

もちろん、じつさいのところは、いろいろな曲をかけていれば2時間なんてあっという間だし(ぜんぶで20曲ちかく聴いた)、生徒も(1学期のように)ひとの話ばかり聴かされるのよりも、音楽を聴かされるほうがまだマシだろう、という考えもあった。なにしろ、9月の上旬はまだ暑かったから。

「ただ、ばくぜんと聴いているだけでは眠たくなってしまうから」というのを理由にして、その日に聴いた曲をよく知っている曲 聴いたことはあるけどあまり知らない曲 ぜんぜん知らない曲 に分類する作業と、「きょう聴いた曲のなかで、いちばん印象に残った曲は何でしたか。また、その理由は何ですか?」という問いにたいする答えを書く作業は、最低限の課題として課しておいたのだけれど、みんなそれなりにきちんと書いてくれていた。

私じしん、この授業において、平井堅の『大きな古時計』と 出会えた し、また(私の好きな)ミスチルがいまの高校生のなかでも根強い人気を持っていることを知れたことなど、いろいろと収穫はあった。そのうえ、ある生徒からは、自分入れて10人の音の好みとかが分かっただけおもしろかった。」という感想まで得たわけだから、「この授業はますますうまくいった」と思っているしだいである。

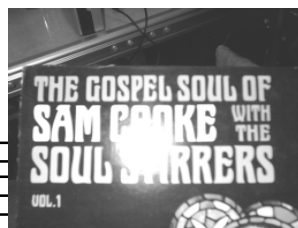
(みつらたかひろ)

からず動いており、何かは話されているのだが、それが「人ないし数人の間のおしゃべりに止まって、クラス全体へ発せられる意見、発言にはならないという印象だった。2回目の授業も、講義形式中心の展開となったため、クラスの雰囲気は変わらなかった。

生徒が積極的に発言しづらかった理由には、素材を「好きな音楽」としたことも関係してい

ただろうと思う。その曲や音楽が好きな理由は?と聞かれても、当人でもそれを言葉で説明することは難しいし、また、人が好きだというものについて、その感覚や嗜好を云々することはどこか憚られるものだからだ。その意味で、活発な話し合いを期待する素材としては、音楽というテーマは少しハードルが高かったかもしれない。授業を作るこちら側にテーマ決めに関して、安易さがあつた点は反省すべきかもしれない。ただ、生徒の言葉が仲間内のおしゃべりに止まって、クラス全体への意見として発せられないということについては、それだけが理由ではないようにも感じた。どこか表立って意見を表明することを恐れているようにも見え、自分の意見が議論の俎上に上ることを避けているように感じられた。単なる憶測だが、仮に自分の意見が否定されると、人格までも否定されたように感じてしまうのだろうか。音楽について自由に話し合おうと授業の最初に呼びかけるときに、意見交換をするのは意見の優劣を決めるためではなく、クラスが共有できる意見の場といったものを作りたかと思う。

(きしださとし)



ことばとであう。 アナウンサーの仕事を通じて

吉見 由香



「ことばとであう。アナウンサーの仕事を通じて」

1、動機

「あの時、あの人に、あの一言を言っていれば、わたしの人生かわったのに」

「……口は災いの元……」こんな思いは誰の胸の中にも、大なり小なり存在するものである。

ことばは、生き物である。

時には、龍のように暴れ、風のようにそよぐことばを仕事のツールとして、早12年。しゃべり手としての職業的側面に於いても、当年30歳のひとりの女性としても、ことばを媒介にして、自らの感情を表現すること、他の人間との交通を活発にすること、また、その手段としてのことばを的確に選びだすことの重要性そして、難しさを日増しに感じている。しゃべり手（アナウンサー）という職業への理解を深める、また、日本という風土で生活をする以上逃れられない日本語、身近なことばに対して、繊細な感覚を養う、この2点を軸に、福井高校での授業に臨んだ。

2、授業内容、風景

今回わたしが用意したのは、1 基本の発声、2 自己紹介、3 ニュース原稿、4 ラジオロ（曲紹介）の4点である。

授業の導入部分として、まずは、アナウンサーの根底部分を感じてもらった。しゃべり手（アナウンサー）の仕事は主に2つに分けられ、必要とされる能力は4部門ある。

仕事

- 1、読み手（ニュースや、ナレーション等）
- 2、表現者（ラジオのパーソナリティ、DJ等）

能力

- 1、読む技術

- 2、発声を支える身体機能

- 3、言語能力（表現能力）

- 4、感性（感情）

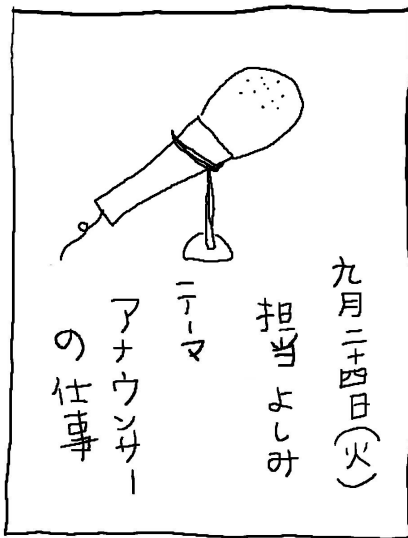
また、そのどの部分にも、幼い頃の読書量で決まる日本語総合力と、リズム感などが要求される。など、なにげない話すという行為も、不断の努力が必要であることを紹介した。

授業を展開するにあたって、お年頃の高校生達が、大きな声を出してくれるか、という懸念があった。しかし、座席表を作成するために、名前の漢字を生徒達に順に説明してもらったところ（例：大吉の吉に、目で見ると見るで、吉見です）、ややうつむき加減ながらアイデアをひねり出し、楽しそうに対応してくれた。まずは一安心。

後は、<TO>にあわせて、ニュースの原稿を読んだり、イントロに合わせて秒単位で曲紹介を試したり。<くやラジ>で普段、生徒達が身近に触れているものであるだけに、思いのほかスムーズに事が運んだ。

初対面であった生徒

達がどのような性格で、どのようなバックグラウンドを持ち、どれ程の能力を持ち合わせているのか全くわからないままでの実技ではあったが、照れながらもたのしそうな瞳が、



かれらの純粋な興味を物語っていたように感じる。ただ、反省点としては、短時間での単発プログラムであったために、表面的な部分のみしか扱えず、今一歩踏み込んだ地点までは到達できなかったことである。

3、まとめ

様々な事象が繰り広げられるこの広い世界。まずは、対象に出逢い、自らの身に微かながらも通して体験してみないと、永遠に、理解の一端とはならない。

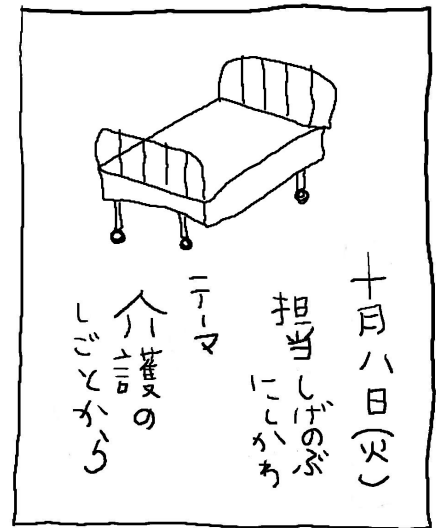
出逢う、触れる、感じる。

今回の「であいのてつぐく」によって、若いかれらの心に、「ことばノ話す」という単語が彼等なりの解釈で書き加えられたとすれば、嬉しい限りである。もちろん、ことばの源泉は「感情」である。しゃべり手として現場に立つ中で、常にその必要性を感じてきた、感情面でのトレーニング（通常、それは主に俳優に向けて

行われるものであるが、わたしは、それを「感情のメンテナンス」と呼び、日常生活でも十分に応用可能であると考え）も機会があれば、体験していただきたい。

今、世界は何が起るか解らない無気味な深度を、たたえている。その世界を分け拓く道具としては、わたしたちは、いまは、ことばしか持ち得ていない。教育現場に於いても、またおとなも含めてことばに對しての、愛情、尊敬、恐れが希薄になってきている今だからこそ、ことばによって、世界を分け拓き、自らを表す訓練を積んでほしいものである。花にも剣にもなることば。長い人生、花を摘んで歩く方が、ずっと、豊かである。

（よしみゆか）



10月8日
五時間目
寝返りについて 重信

福井高校での授業を終えて

重信嘉彦

私は平成14年10月8日(日)5限目に、『寝返りについて』介護の場面での一場面』というテーマで授業を実施した。当日、実習室(教室)で学生を最初に見たときの印象は、「噂通りの学生たち。これから1時間も長いな」と感じた。

事前打ち合わせの時や、既に授業を終えられていた方たちから、学生の様子を聞いていただけに、少し不安を抱えた状態で授業を開始した。授業が始まってからの学生たちの態度は、正直なところあまり褒められたものではなかった。授業前とあまり変わらない態度

であった。友達同士で話をしてばかりで、私の話を聞いているものはいない。

私自身今回の授業に当たり計画書を作成する中で、かしまった状態で授業を進めるのではなく、介護の現場での様子を紹介することで少しでも介護に対して関心を持つてほしい。そう思った思いがあったので、最初の挨拶では「気楽な気持ちで僕の話聞いてください。」「少しでも介護のことを分かってもらったら今日の授業は充分です」と言った。今振り返ると、その発言が反省点の始まりであつたと思う。授業内容は以下の通りである。

導入：1) 講師自己紹介

2) 今回の授業のねらいについて

実習オリエンテーション：1) 授業のタイムプログラムの説明

実習：1) 寝返りについて

2) 寝返り(説明なし)

3) 寝返り(説明あり)

意見発表：1) 寝返り介助を実際に実施した感想発表
まとめ

導入では、同居家族に高齢者がいてないこともあり、介護に関心がない学生が多い中で、1名だけ介護(老人介護)に興味を持っている学生(男子学生)がいた。授業を進めていく中でこの学生をパートナー的存在にしよう

と考えた。しかし、この学生は控えめな性格だったのか、私が発言を求めてもあまり積極的な返答はなかった。この学生だけでなく、授業に参加していた学生全員が積極的に参加をしていたわけでもないようであり、その後の授業進行が円滑に出来なかったことは私の誤算であった。

実習オリエンテーション・実習では、まず今回の授業テーマである『寝返り』の必要性を説明した。「介護の現場での仕事とは？」と聞かれてイメージするのが、食事介助やおむつ交換（排泄介助）などをイメージする人が多いと思う。しかし、『寝返り（介助）』をイメージする人（学生）はいてないと考えた。（実際にそうであった。）学生には褥瘡の写真を見せることで、『寝返り』の介助の必要性や、寝返り介助も介護の中では重要な介護であることは理解してもらえたと思う。

続いて寝返り介助を実践してもらった。ここでのポイントは、『相手の身体を動かすのに力が必要でないこと』を伝えることにしていたが、学生たちの消極的な授業態度（ふざけた態度）で、それは不十分なものになってしまった。これは学生が介護に関心がないことや、実習をするにあたり照れなどがあつたことが挙げられると思う。

意見交換では、それまでの授業の雰囲気の影響して発言は少なかった。（無かったに等し

いと感じた。）学生の多くが、私（講師）が話をしている時には相手の話を聞かずに自分たちは好き好きに話をしている。発言を求められると、先程までの騒がしさが嘘のように黙り込む。意見交換とは程遠い状況になってしまった。

まとめでは、私が今回の授業で最低限伝えたかったことだけを話した。学生たちは一応に静かにして、私の話を聞いてくれていたと感じられた。このことは感謝している。

授業進行があまりにも早くなってしまい、授業時間が大幅に余ってしまったために、学生から私に対して質問をすることになった。学生のほとんどが「別に質問はない」とのことであつたが、一人の学生から「褥瘡は何歳くらいからできるんですか？」との質問があつた。それまで私自身「質問されても答える気にならんわ！」と思っていただけに、この学生からの質問を受けた時に「最悪な状態での

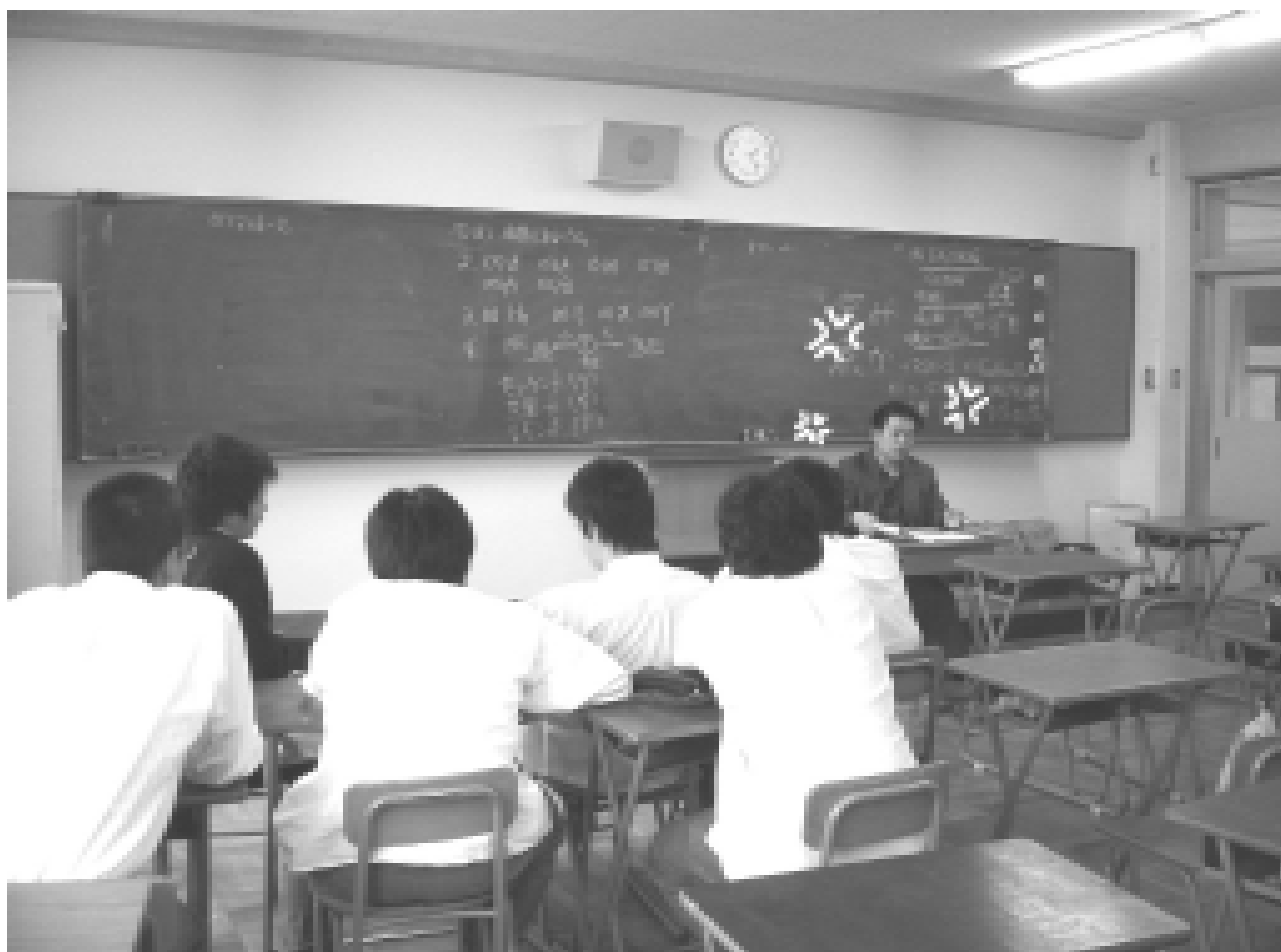
授業ではあつたが、介護現場の一場面を少しは伝えることが出来た」と思うことができたことが私自身大きな感想であつた。

最後に、私はこれまで施設職員の指導者として、実習生を相手に教えることを何度か経験しているが、介護に興味のない学生に教えることの難しさを感じた。

関心がない学生に対して、どこまで伝える必要があるのか？介護に関心がある高校2年生には、どこまで伝えることが出来たのであるのか？今回の授業に参加した学生は、何を得たのかが知りたいという思いもある。（たぶん何も得たものはないと思うが・・・。）

（しげのぶよしひこ 医療法人ガラシア会介護老人保健施設ニューライフガラシア 介護福祉士）





10月8日
六時間目
若さと老い 西川

「若さと老い」

西川 勝

平成14年10月8日(火)

テーマ：中年看護師が語る「若さと老い」

目的：介護老人保健施設で高齢者ケアに携わる看護師の視点から、「若さと老い」について語ることで、受講する高校生の

自己観念に揺さぶりをかけてみたい。

教材：「考える本のはなし10」(住宅顕信の句集『未完成』に関する書評エッセイ、西川の文章、メディア出版 Neontal Care 2002 vol.15 no.10 54-55頁)

上記内容で、福井高校での授業を行った。当初の予定では、痴呆老人ケアの話もする予定であったが取りやめた。その理由は、当日の高校生の授業態度に腹を立てたばかりが、話をする気を失ってしまったからである。ぼくは、職場の同僚である介護福祉士の重信さんと二人で授業を計画したのだが、重信さんが何日もかけて練った「寝返りの援助」という実習授業をまったく真面目に受けようとしないう彼女たちを見て、ぼくはまさに「**ぶちきれ**」の状態になってしまっていたのだ。実習ベッドに勝手に寝転がり、奇声を上げた、生徒同士がぶざけあう。授業中も、肩から鞆を下ろそうともせず、携帯電話をもてあそぶ姿。講師の話なんか聞く素振りすらみせずに雑談する連中に、怒鳴りつけたくなるのを

押さえて、視線をきつくるだけで辛抱していたのだが、怒りで自分の口の中がカラカラになっていくのが止められなかった。50分の授業がむやみに長かった。

授業の後、「どうして、生徒に注意しなかったんだ」と、重信さんに八つ当たりするほど、ぼくの攻撃性は高まっていた。

ぼくは、授業で開口一番、**君、喧嘩を売られたことがあるか**」と問いかけ、のらくら返事する男子生徒に向かって「ぼくは、今、そんな気分なんだよ」と睨み付ける。教室の雰囲気気まずく凍り始める。「**ざまあみろ。お前たちの好きなようには、させないぞ**」と思った。とにかく、授業中の私語は禁止した。すぐに何人かが机にうつ伏せになった。途中、何度か、寝た振りしてる生徒のところへ行き起こしてみるが、わざとらしい寝ぼけ顔でこちらを見て、特に反抗するでもない無気力な様子に、心底、こっちのやる気は失せた。彼らの作戦勝ちというところだろう。殴って起こすわけにもいかないので、怒気を含んだ声で授業を続けるしかなかった。どんな風に話したのかは、正直言って、もう覚えていない。ただ、住宅顕信という25歳で不遇のうちに夭折した自由律の俳人の話で、若さの栄光と惨めさを伝えようとした。顕信の句を少し紹介する。

「鬼とは私のことが豆がまかれる」

「ずぶぬれて犬ころ」

「若さとはこんな淋しい春なのか」

「捨てられた人形がみせたからくり」

若さに特有の反抗、虚栄と傲慢、自意識。

燃えさかる炎とならずとも、せめて火花を散らす覚悟が、君たちにはないのか。ぼくは、本当に腹が立っていた。

授業の最後にこう言い捨てた。「若さについて語る中年であるぼくは、決して君たちと対等でありたくもないし、理解されたいとも思わなかった。**こんな出会いもあるんだ、ということだけは覚えておきなさい**」

大人に反抗していたはずの自分が、若さに反抗している。ぼくも立派な中年になった。

しかし、久しぶりに憤激した時間を手に入れることができた。感謝してますよ。福井高校の諸君。（にしかわまさる 介護老人保健施設ニユーライアフガラシア 看護師）

恋愛について

田中俊英



十月二十日(火)
担当たなか
テーマ
恋愛
について

なんとなくおもしろそうだからという僕のいつもの理由で、深く考えもせずこのテーマにしたんですが、いやあ大人相手だと恋愛話は絶対盛り上がるのに、高校生は全然だめでした。他の授業もそうだったかもしれませんが、あまり反応もなく、あの「私語」というやつですか、くすくすぺちゃぺちゃとよくしゃべる、あの姿勢に対してめちゃくちゃ腹が立ったのです。でもよく考えると、はるか昔教育実習に行った際も、今回と同じような反応（授業内容は通常の教科でしたが）なのでした。あのときは僕自身めちゃくちゃ上がっていて、生徒の反応を見る余裕もなかったんですね。でも今回は、わりと授業内容を準備していき、また僕も年齢を重ねたので生徒たちを見る余裕もできたのでしょう。

まあとりあえず内容は、恋愛一般を大ざっぱに語るというよりは、「恋愛の出会い」に絞りました。教材は、有名でべたなビデオを5本（たぶん5本だったと思う）借りていて、「ここ!」という必殺の出会い場面を、各ビデオごとに15分くらい流しました。それで、ディスカッションがちょっとでもできれば、みたいな狙いでした。ビデオはまず「タイタニック」。ディカプリオがヒロインを救う場面です。続いて、キムタクと常盤貴子の「ビューティフル・ライフ」。美容師のキムタクが車椅子を利用する常盤と出会い、髪をカットする場面。以上の2つは「ひとめぼれ」系ですね。続いて「失楽園」。中年の男女が不倫旅行に行く際、ドキドキしながら手を握る場面。これは「不倫」系です。

流れははっきり覚えてないのですが、確かここで休憩を挟み後半に突入しました。生徒たちは目を輝かせて見ている人もいたのですが、半分はお昼寝モード、半分は私語モードでした。主催者の方には申し訳なかったのですが、前夜一晩かけてすべてのビデオを見て「これは名シーンだから絶対盛り上がるはずだ」と自信を持って挑んだ反動からか、このあたりから僕は何となくやる気がなくなっていました。内心、「どうせディスカッションも盛り上がらないんだし、適当にビデオを引き延ばして終わろうかな」みたいな感じでした。

残りのビデオは、メグ・ライアン「ユーガットメール」。「メール出会い」系も入れたかったです。そして最後は中山美穂の「ラブレター」。これは中山美穂の回想シーン（酒井美紀が演じる中学時代）に焦点を当てました。つまり「学園」系ですね。このように多種多様な教材にもかかわらず（自分で言ってるだけですが）、ディスカッションも予想通りいまいち盛り上がりませんでした。まあ僕の手抜きが伝染したのかもしれないんですが、あとから三浦さんや高橋さんに聞くと「どの授業もあんなもんですよ」とのこと。

ということは、他の講師のみなさんも、お昼寝モードや私語モードに耐えたんでしょうか。最近は大人数相手の真面目な勉強会とか講演会しか体験してなくて、10代相手の「私語にもめげず我慢して教育するぞ」的環境は、脆弱な僕には厳しすぎます。世の先生たちはすごい、と生まれて初めて教師のみなさんを尊敬したりもしました。

でも。出席者全員から返ってきたアンケートを見ると、お昼寝していたはずの子がちゃんと見ていたりするんですね。私語していたはずの子もわりと皮肉めいたかっこいいことを書いていたり（全体的に、「タイタニック」が好評で、「失樂園」が最低評価でした。「失樂園」は「キモイ」らしい。じゃあ僕みたいなおっさんの恋は「キモイ」んだろうか。あと、キムタクがそれほど評価されていなかったのは、キムタクの支持層がすでに20代後半に移動しているからなのかも）。

まあつまり、僕は「教育的態度」でもって生徒たちを暖かく包容できなかったということ。僕は日頃、10代の青年相手に1対1で悩みを聞いたりしゃべる仕事をしていますが、ふだんの仕事のほうがはるかに楽だと思いました。いやあ、教壇で教えるのはしんどいわ。

「教室」もなんだか狭くて暗くて、以前「不登校と倫理」というテーマで「学校という建物そのものが子どもを変化させる」みたいな話し合いをしたことがあって、それを思い出しました。

10代は、ただでさえ恋愛みたいな「恥ずかしい」テーマを友達以外にしゃべるのは苦手なのに、それも教室で、しかも友達でない人の前でしゃべらされるのは結構苦痛だったのかな、なんていう反省もしました。

教室では、恋愛みたいな身近でナイーブな問題よりは、もっと自分の体験から距離をとって考えることのできるテーマのほうが適しているのかも。まあそれも伝える人の力量次第でしょうが。

思い出すまま書いてみました。

（たなかとしひで）



十二月五日(火)

担当 いなば

テーマ

身近なトラブルを
解決する

1 はじめに

二〇〇二年十一月五日に表記テーマで、福井高校で授業を行いました。その概要と考察のほか、資料として、その際の生徒からのアンケートを集計したものを添付して、ここに報告します。

私自身、元裁判官として、また、紛争解決の専門家として、現在法律家相手に、Mediation(調停)の技法のトレーニングをしていますので、今回の高校生への授業は私が試される場面であるとして、緊張をしました。案の定相当苦勞しましたが、新たな発見があり、驚き感動しました。

2 概要

ビデオとアンケートを用いました。用いたビデオ(私がスクリプトを書き、劇団が演じたもの、素材は本当の事件)は、「伊藤さん」が、「高野さん」夫婦の隣の犬が鳴いてうるさいというのに、これを高野さんが認めず、まず、当事者同士で交渉するがうまくいかず、下手な第三者(調停者、Mediator)が入ってもうまくいかず、上手い(トレーニングを受けた)調停者が仲介すると対話ができるという、3部構成のもので、このスクリプトは大部ですので、この報告書には掲載していません。このビデオを順に見てもらい、それぞれ、(一)なぜこの当事者同士の話し合いは上手くいかなかったのか、(二)第三者(山田さん)が入ってもなぜ上手くいかなかったのか、(三)上手い調停者はどこが上手かったのか、

もめごと・トラブルを
解決していくということ

稲葉一人

かと、一人一人、私が、聞き出していくという戦術をとりましたが(当初は全体で対話ができると思いましたが、無理と考え、一人一人とじっくり対話していくことにしました)。同時に、手元にそれぞれの問いを書いた紙を配り、私との対話・会話でたどり着いた点を、自分の言葉で書いてもらう(これが後記アンケートです)ということ副次的に用いました。一見、一人一人の意見を聴くという作業でありながら、残りのものは私語をしながら、これに関連して話をしていたり、ビデオを共通のものとして、他人事としてとらえず、私を中心とした話でありながら、それぞれがよく考えてくれました。たとえば、Wさんは、(一)について、高野さんが認めなかったもので、うまくいかない、だから、証拠が必要だ、しかし、それをテープでとって

持つて行っても、自分の犬ではないといわれてしまうので、ビデオに撮って持つて行ったら・・・として、様々な相手の対応を想定して、具体的な方法を考えてくれました。Mくんは、「同じ被害を蒙った多数の近所の人を連れて行ったらいいのでは」としますが、「では君が高野さんだったらどうするか」と質問すると、よけいに反発することに気づき、「中立者が必要だ」と応答します。MさんとHさんは、仲良しですが、「もし君たちが高野さんで、証拠を突きつけられるとどうするか」と問うと、Mさんは「納得できないし反発を感じる」とし、Hさんは、「すぐにあきらめて謝ってしまう」とし、二人が違う対応をとるということに気づき、「それはなんだろう」と水を向けると、Hさんは、「人だから、考えが違う」と。同じことは、全員について言えます。(二)・(三)についても、とてもすばらしい応答が、これはむしろ専門家や大人ではない、とてもユニークで私が教えられる回答を自ら搾り出してくれました。どの答えもそれなりに光っていましたし、私がこの答えをしてくと示唆は一切しなくとも(私は、答えはないと思っていますが)、なんとか出てきます。ただ、全員が同じ話題を、意見の違いを超えて話し合う訓練がなされていないため、一つの問題を中心に全員を引き込むことは難しいのですが、一

人一人ねばり強く聴き、抽象的な言葉で思考を止めようとする、(ここぞ粘り)chunk downというcoachingの手法で塊を揉みほぐすと、実に自分の言葉で、深い言葉が返ってきたことは事実ですし、私自身もこれを受けて変わってきたしました。Zくんはこんな授業が面白いとささやいてくれ(本当かどうか分からないが)、彼らは、くしくも、成功した調停者は、自分の意見押し付けるのではなく、「よく聴いていた」点に成功のポイントがあると言ってくれていました。少々、干渉くさい授業でしたし、多大なエネルギーが必要ですが、多く得るところはあります。

3 考察

この生徒たちは、紛争についてこれまで真剣に考えたことはなかったと思います。しかし、彼ら彼女らの言葉を味わってみると、私との対話で出てきた、至極の言葉は、彼ら彼女らの生活空間から生まれた生の言葉であらうと考えられます。誘導されて出てきたのでも、彼ら彼女らが、特殊というのでもありません。普通の高校2年生です。人は、その事態に想像力を働かせ、関心を持ち、また、できれば、立場を入れ替えて考えることができれば、本当に思いもかけない解決策や見方を示してくれることを示していると思います。私は紛争解決のトレーニングを

する者として、絶えず市民らは、自己解決能力を有している、専門家は市民から学べということを述べていますが、この授業はこれを十分に裏付けることができます。その意味でも、私たちは、生徒を信じ、彼ら彼女から真摯に学ぶべきといえるのです。この授業は、私にとっても大変勉強になりました。

また、教育方法としても検討に値すると思います。社会における実際の事件で、かつ、身近な事案を元にして具体的に自分もその当事者となつて考えることは、生徒同士がお互いの考えや受け止め方の多様性を知ることができ、また、このような授業をすることにより、対人紛争問題の解決能力を持つことができるとすれば、これはむしろ社会に生きるための基礎的スキルと言え、これこそ、中高校性が学校で学ぶことだろうと考えます。

米国では、Peer Mediationとして、学校内で起こった生の事件・トラブルを、生徒が調停者(Mediator)となつて、調整をするという学校教育が盛んに行われていますが、これは日本での初めての導入の試みといえます。

(いなばかずと 京都大学大学院医学研究科、科学技術文明研究所特別研究員)

以下のアンケートでは、個人名を示していませんが、番号を付記することで、一人の生徒が、この授業の中でどのような発展をして行ったかを見ていただきたいと思います。

アンケート

1 伊藤さんと高野らとの話がうまくいかなかった理由はなんだと思いますか。

- 高野さんが原因を作っている(1)
- 伊藤さんが高野さん宅に一人で行ったから(2)
- 話ののりで「吠えていない」と言ってしまう、「やっぱり吠えていたかも」と言えなかった(3)
- 高野さんが自分の非を認めなかったから(4)
- 高野さんが自分の犬が吠えているのに認めなかったから(5)
- 高野さんが犬を吠えたことを否定した(6)
- 高野さんが伊藤さんの意見を一方的に否定したから(7)
- 証拠があるわけではないから(8)
- 伊藤さんと高野さんの話し合いで、高野さんが相手にしていない(8)
- 高野さんが強いから(9)

2 どうすれば話し合いがうまくいくと思いますか。

- 高野さんが解決策を出せばいい(1)
- 近所の人を連れて一緒に高野さんと話し合いをする(2)
- どっちの人でも一方的に話すぎているから、落ち着けばいい(10)
- 伊藤さんが高野さんを納得させればいい(10)
- まず、伊藤さんが個人でできる対策からスタートする。窓を閉める、音楽をかけて寝る。でも別の問題が発生しそう(3)
- 証拠として犬の声とかを録音しておく。だけでも、他の犬とか言われそう。ビデオで撮る。でも十分ではないかも(3)
- 高野さんの周りの人と手を組む(3)
- とにかく人の話を聴け(3)
- 伊藤さんと同じ立場の人を連れてきてまた抗議する(4)
- 中立の立場にいる人を連れて行く(4)
- まわりの意見を聴く(5)
- 高野さんが認めて謝る。しかし、謝ってすむ問題じゃない。部屋で飼う(6)
- 犬が吠えているときに、文句を言いに行く(6)
- 伊藤さんが人を集め、高野さんに文句を言いに行く(7)
- 犬の鳴き声を録音したテープを持っていく(8)

多くの人を呼んで署名運動をする(8)

もっと多くの同じ不安や不満を持っている人を連れてくる(8)

証拠が必要(9)

3 調停者が間に入っても話がうまくいかなかった理由はなんだと思いますか。

まとめるのが下手だった。リーダーが必要だった(1)

調停者が優柔不断だったから。軸がない(2)

話を順序立てないから、中立の人が足でまといとなった(10)

調停者が最初から自分の意見を言っていたらよかったかも(5)

ここまできたら引き下がれない。性格が違うから(5)

間に入っている人がしっかりしていないから。伊藤さんが意見を言ったらそっちについて、高野さんが意見を言ったら高野さんにつくからもっとしっかりした自分の意見を強気で言ったらいい(6)

中間にいた人が場を仕切っていなかった(7)

犬のことは認めて謝るが、ビデオを勝手に取るのは許さん(7)

中間にいる人が中途半端(8)

証拠を持ってきても納得しない(8)

真中の人が頼りない(9)

4 調停者が入って話がうまくいった理由はなんだと思いますか。

お互いのことを分かる人(1)

きまりがあった(1)

調停者がしっかりしていたから(2)

中立の人が何もしないのにうまくまとまった(10)

まとめることをしなかった。双方の話しやすい環境を作ったから(4)

自分だったらすぐに謝る。証拠とかつきつけられる前に苦情が来た時点でごめんなさい(6)

両方の意見をしっかり聴いてどうするか本人同士で決めさせた(6)

調停の人が、両者ともに、冷静に話し合える状況を作った(7)

中間に入るものがしっかりと両方の意見に流されないようにする(8)



十二月二十六日(火)
担当 ルーシー
あいごわ
テーマ
死と生について
考える

死と生について考える

リュドミラ・スラヴィアンスカ+会沢久仁子

高校生とともに死と生について考えてみたいと、臨床哲学の留学生で安楽死を研究するルーシーさんと会沢とで二回の授業を持った。第一回目は、最初の時間にルーシーさんが生徒たちに彼らの死生観についてアンケートし、ルーシーさんと生徒たち、そして生徒たち同士の交流と意見交換を図った。次の時間には会沢が関心を持っているホスピスについて紹介した。第二回目には、自分の死を疑似体験するワークを行い、各自のワークを振り返って感想を述べてもらった。また遺された人の悲しみについても少し触れた。



	あるかどうかはわかりません ghosts	
N.O. ZZ 12 12		

11.26.2002

五時間目 ルーシー

On the 26 of November I visited Fukui High School and spoke with the students about the problems of death and related topics. I was very impressed by this visit because nobody had made a survey about the way young people think about death.

My doctoral thesis concerns the problems of euthanasia, so I was interested in the way different generations think about them and death in general. I made a questionnaire and asked the pupils to answer questions like:

1. Do you believe in God?
2. Do you have a religion?
3. Do you believe in life after death?
4. What is scary in death?
5. Do you believe in ghosts?
6. If you had the choice, would you prefer to live a longer, but "healthy" life, or a shorter, but more excited and pleasant life?
7. Are people, who commit suicides brave, or cowards?

Q
UESTIONS
from
LUSY

The questionnaire was in English and most of the students also answered in English. I was not very surprised by their answers. My impression that young people in Japan are mainly atheists was confirmed by the results of this questionnaire. None of the students declared that he/she has a religion and nobody believed in God. The same applied to life after death. But some of the pupils drew pictures of ghosts and said they believe in ghosts. It seemed they really enjoyed drawing as a way to express their views and thoughts.

The majority of the class declared that a shorter, but more pleasant and excited life is to be preferred than a longer life in which you have to abstain from plenty of "unhealthy pleasures".

Whether suicide is an act of braveness or cowardice - most of the answers were: people, who commit suicide, are cowards. Few pupils said that suicide in general is a result of fear of life and facing the reality, but courage is needed for the very act of suicide.

After the students finished writing we discussed all the questions, although I had to force them to speak. I feel that in Japanese school system students are not initiative to express their own opinions and to be active during the classes. Another problem is tiredness. Some of the students came to the class obviously exhausted. A boy fell asleep in the beginning and nobody could wake him up. I left him to sleep and told the others not to disturb him. However, in the beginning he wrote his answers to the questionnaire and they were very clever.

My deep feeling is that Japanese high school students are overburdened and the level of stress is too high, which could seriously reflect their health in future. It makes no sense to go to school and sleep during the classes or force yourself to stay awake. Better to afford some rest in order to be in a good health and more productive. But still non-attending classes is regarded as a sin.
(Lyudmila Slavianska)

私が死と生を授業のテーマにしたのは、三年来ホスピスに関わってきたことによる。私はそれ以前は死にはあまり関心がなく、生きていることを当然と思い、いかに生きるかに関心があった。しかしホスピスに関わるなかで死と生について気付かされたことがいくつかあり、それを伝えてみたいと思った。自分が高校生のときを振り返ると、私は田舎の祖父が死んでも動揺するほどではなかったし、自分の死を想像しても身近な人の悲しみをリアルには想像できず、何も変わらないだろうと思っていた。死にまつわる体験や感じ方は人それぞれかもしれないが、高校生が死について学び、考えたり人と話し合う機会があってもよいのではないか。この授業では、まずホスピスについて紹介し、それから自分の死と生について少し考えてもらうことにした。

ホスピス紹介では、私はホスピスのロゴを刺繍した黄色いボランティア用エプロンを着て、写真を見せるために皆で机を合わせた。「何でエプロンしてるの?」「何するの? 心霊写真見るの?」と多少興味を引くことができた。気楽に、あまり深刻にならずに、ホスピスを紹介したいと思っていた。「ホスピス」という言葉を今まで聞いたことがあるか確認したところ、誰もいないとのこと。「ホスピスとは終末期の人たちが最期の時間をよりよく過ごせるよう援助していこうという考え方やシステムのことです。」と一言説明して、私がホスピスに関わる成り行きを含め、合衆国の在宅ホスピスで研修した時の写真を見せて話した。「これは何をしてると思う?」「この人は何をする人?」と問いかけながら、エピソードも交えてホスピスを説明し、簡単なまとめのプリントも使って知識を押さえた。

さらに、日本のホスピスについても、私がボランティアをする東神戸病院ホスピスのパンフレットや写真を見せて説明した。しかし、十人が机を合わせると一枚の写真を一度に全員に見せることができず、一枚ずつ回覧していたところ、興味を失って写真を見ようとせずに寝たりしゃべったりする生徒たちが多くなってきた。写真が見にくいことは予想していたが、それでも今回は拡大コピーより生写真のリアリティーを期待して使ったのだったが。そのような生徒たちの様子に私も話をしづらくなり、私がホスピスで気付いたり感じることを話そうと思っていたがあまり話せなかった。例えば死を自分や周りの人にいつやって来るかわからないものとして意識するようになったことや、そうなったときにできるだけ後悔しないように周りの人に普段から自分の気持ちを伝え、良い関係を持とうとしていること、ホスピスではほとんど何もできなくなった人でも生きているだけで大切に思われること、そのように人が大切にされる社会は安心できること、日々の生活に敏感でありたいと思うこと。あまり話せなかったのは少し残念だったが、聞いてもらえないのだから仕方ない。何でも聞いてもらうのは無理だし、聞いてほしいなら聞いてもらえる態勢を作らなければならない。





私の小難しい感想を言うのはあきらめ、これまでのホスピスの話について質問を一つと、一番印象に残ったことをプリントに書いてもらった。すると、「ホスピスに来た人はみんな満ぞくしているのですか。」とホスピスケアを受ける人の気持ちを考えたり、「亡くなっていく人たちを見てかなしくなったりしないのですか？」とか、「大変ですか。」「仕事内容はどのようなものなのか?」「ホスピスの医師などはボランティアでやってるのかな。」とホスピスで働くことについて考えてくれた。「外面的なボランティアとちがうのか? みたい。内面的」とホスピスで働くことが労力の提供だけではなく、精神的な支援であり、ホスピスの理念に関与することではないのかと感付く問いもあった。「ホスピスってどういう意味??」とあらためての問いかけも。私は皆の机をまわりながら、質問に一つずつ答えていった。それぞれの問いかけをありがたく受け止め、賞賛しつつ、例えば「写真ではみんな楽しそうだけど、実際には患者さんや家族もスタッフも辛いことや大変なことが沢山あるの。でもね、だからこそ楽しむことを大切にしてるのよ。」と説明を加えることができた。

一番印象に残ったことには、「思いやりがないとできないしごとやと思った。」とか、「気持ちって大切だなあ・・・」とハートマークを描いたり、「二週間後にいった時にかん者さんがいなかったらさびしいだろうな ーって思った。」と書き、ホスピスを支える気持ちに反応していた。「生きてるってすばらしい」「人間はたすけあいなんだ!!」という言葉も、いくらか定型的ではあるが、この授業から出てきた言葉と思えば少し嬉しい。「ホスピスのパンフレットや写真を見て、特ように似てそう。設備も似てる。」と書いた生徒は、夏に学校から特別養護老人ホームにボランティアに行ったとのこと。「最期が近いからお酒やタバコも自由っていうのはすごいかも...。(フツの所だと体に悪いってとめられそう...。)」というも。これら二つの意見は、ホスピスが生活を支える場であると感じ取っている。「亡くなるまでの短い期間、快適に過ごしてもらうために頑張ることはとても良いことだと思う。もしこういう人が少ないのならどんどん増やしていくといいと思う。」との意見。さらに、「ホスピスの仕事そのものが哲学っぽく思った。人間は死に向かって生きてる。」人間は死に向かって生きてると、哲学者たちはしばしば言う。しかしこう書いた生徒は哲学史の知識に詳しいわけではない。どこかで聞いたことがふと思い浮かんだのだろうか。本質的なことが、本人もそれと明確に意識しないままにぼろぼろこぼされる。

皆の感想に感心しつつも、もう少しじっくり考えてもらうにはどうしたらいいだろうと思う。もっと時間をかけて学習することだろうか。生徒たちが自分の感想を表明し、それについて互いに理解を深めていくことだろうか。次の方策はまだはっきりしない。今回の授業では、私を通して「ホスピス」は生徒たちにはまだ遠いものに留まったと感じる。まあそれかもしれないけれど、でもどうしたらいいだろう。

(あいざわくにこ)

自分の死を疑似体験

会沢久仁子



死を
疑似体験
ワーク
十二月三日(火)
担当 あいさわ

いつかはきっと来るがいつ来るかはわからず、普段はあまり考えないかもしれない、死。それを生徒たちにできるだけ自分に関わるものとして考えてみてほしい。そこで、前回の死生観のアンケートとホスピスという社会的取り組みの紹介とを軽く振り返ったうえで、今回は自分の死を疑似体験する紙上ワークに取り組んでもらった。

このワークでは、第一に自分にとって大切なものを、4種類3つづつ、計12個カードに書き出す。4種類とは、「形のあるたいせつなもの」、「大切な人」、「大切な活動」(例えば音楽を聴くとか、勉強、ボランティア活動)、「形のない大切なもの」である。次に自分が不治の病であと半年の命

だと判ったと仮定して、病気の経過に合わせて半年、一ヶ月、一週間、死の当日と、そのときに自分のしたいことを書き出し、また大切なもののうちあきらめるものがあれば、それを書き出し、そのカードを破るか脇に除けていく。こうして自分の死の過程を想像し、そのとき自分にとって大切なものを考える。

このワークは、藤井理恵・藤井美和『たましいのケア 病む人のかたわらに』(いのちのことば社、2000年)に紹介されている藤井美和先生のワークを主に参考にし、熊田亘『高校生と学ぶ死「死の授業」の一年間』(清水書院、1998年)からもヒントを得て作成した。藤井美和先生は、合衆国に留学し、このようなワークを行うトレーニングも受け、現在は関西学院大学で死生学を教えている。私は看護学校ですでに一度ワークを試みており、また藤井先生にも連絡を取って資料とアドバイスとをいただき、それらをもとに今回の授業を準備した。今回は気を付けて、もしこのワークをしたくなければなくてもいいし、続けられない場合は途中で止めてもよいことをワークの最初に伝え、またワークの各段階で深呼吸を挟んだ。

生徒たちは、全体的にはしゃべり合ったりして、ワークに取り組みはするがあまり集中しなかった。私があまり深刻にならないように進出したことも影響したと思う。余命一ヶ月として自分のしたいことを書くように言ったら、「そなん、実際間際にならな分からへん。」とある生徒。そのとおりだけど、だからこそこうして考えてみようとしているのに。しかし一番ふざけていた生徒が「おれこういうの好きやで。」とも言っていた。ほとんどやる気を見せない生徒もいるが、一生懸命考えたり、ちらっと真剣な顔を見せる生徒も少し。最後の日を想像して涙を流してしまう生徒もいた。これは想定していたことだったが。

以上が5時間目。休み時間に他のクラスの生徒が来て「何してんの?」と聞くので、「死について考えてるの。」と答え、「怖い!」との反応。また他の生徒たちも「何してんの?」とクラスの生徒に尋ねて、ワークのプリントを見せられ、「えーっ!怖いっ!」と反応していた。反応があるのはいい。こんなのつまらんと白けられると少し辛い。

6時間目は、まず各自で先のワークを振り返ってプリントを記入してもらい、それから意見交換をした。各自の振り返りを「それぞれの感想」にまとめたので参照してほしい。このまとめは後日生徒たちに配布した。ワークに取り組めた生徒とそうでない生徒との差が表れている。それでもあまり集中しなかった生徒たちでも核心の在り処に気付いていたり、興味深い一言を書く。それならもう少し正面から突っ込んでくれたらいいのに。それは真面目すぎて無理な注文かもしれないが、教える側としてはそれを期待して工夫して努力したい。

意見交換では、最初に、余命半年、一ヶ月、一週間で何をしたいと思ったかそれぞれ数人に聞いた。そして半年間の変化を尋ねたところ、「アウト・ドア派からイン・ドア派になった。」とある生徒は答えた。余命半年では買い物や旅行をしたいと思うが、一ヶ月を切ると家で家族や友達と過ごしたくなったとのこと。この生徒はあまりワークに集中せず「わかんない」と言っていたにもかかわらずこのように直感的な表現力を示し、印象に残った。また4種類の大切なもののうち何が大切だったかや、死の過程で自分を支えたものも数人に聞いた。「お金はあまり大事ではなかった。」との答えは高校生らしい。「でもね、みんなのお

父さんやお母さんだったら、家族のためにお金を遣そうとするかもしれないね。」と補足した。最期に伝えなかったことを聞くと、「ありがとう」、そして「元気でね」も。「ありがとう」は私も言いたいと思っていたが、「元気でね」とまわりの人たちを気遣う気持ちにはハッとさせられた。

ワークのまとめとして、私自身がワークで気付いたことも交えつつ、自分の死が近づいたときにしたいことや大切なことを考えておけば普段からそれらを大切にできるだろうし、死にゆくある段階が来るまでにすべきこともわかる場合があると話した。

さらに、死ぬ側だけでなく遣される側の気持ちにも触れてほしいと思い、残りの時間は私がホスピスの遺族会で遺族の人たちの経験をうかがい文章にまとめたものを配り、拾い読みした。そして、死別のショックや悲嘆は半年から数年も続くことがあり、死別に伴ないさまざまな激しい感情を感じるても当然であること、そのときはあまり自分の感情を押さえず、信頼できる人に話すとよいこと、そしていつかきっと立ち直りがあること、また悲しんでいる人に対しては安易に励まさず話を聞いてあげるのがよいことを、簡単に話した。

さて、生徒たちはもうこの授業を忘れてしまったかもしれない。そうして普段は考えないこともかもしれないが、それでも死を少し心に留める機会を持ててよかった。もしかすると何かの機会に死について学んだことを思い出すかもしれないから。また、「てつがく」では例えば生死のように人にとって本質的なことを考えるんだなど、この授業で感じてもらえたようにも思うから。これからも、死と生について考える授業をさらに多様に、そして深めていけたらと思う。(あいざわくにこ)

ワーク：私にとって大切なものは—私が死にゆくときに
それぞれの感想

6．自分の死を疑似体験するワークを終えて

6 - 1．自分の死の体験を振り返ってみて、どんなことに気付きますか。自分の死の体験を通してどんなことを感じましたか。

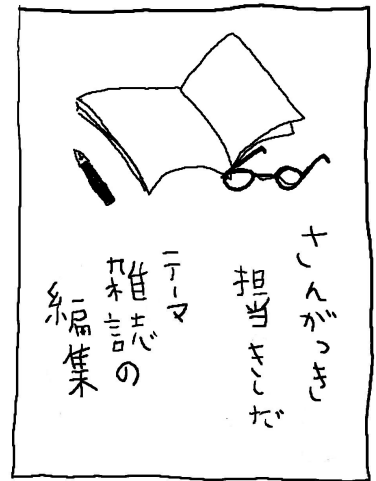
- ・WWEは最高だと気付きました。プロレスラーはつねに死ととなりあわせだと感じました。
- ・そこにあるききをかんじました。
- ・こわい!!! かなしい(>0<)・きょうふ　・早かった　・わかんない。
- ・最後まで人間関係を大切にしたい。人の肌に触れていたいという気持ちが強かったというが残っていた気がする。こういう感じ方をしたいということが分かった。
- ・今だいじにしている物もあと半年といわれてみると別にどうでもいい物になってしまった。結局今だいじにしていても形のある物で大事な物は最後に切り捨ててしまう。
- ・5番目(当日)のところで少し(泣きそうになって)きた...
- ・すてられないものがいっぱいあった。

6 - 2．死にゆく過程であなたを支えたものは何でしたか。

- ・闘魂・好きなこと　ぼくを支えてくれたすべての人々　・友達や家族
- ・こたつにみかん　・みんなの愛情　・気力
- ・友達(友情)家族　愛　等・家族・友達　・(好きなことに対する)執念?
- ・物とかではなくて家族、知人、友達、カレ、カノとかの自分の周りにいる人、自分の周りにいる人への自分からの情や向こうから自分への情

6 - 3．最後に伝えたいことは何でしたか。

- ・Don't try this at home.　・わすれないで　・「生きる。」
 - ・さようなら　みなさんさようなら　おつかれさまでした。・わかんない。
 - ・しんどい　・ありがとう
 - ・探してみれば大切な人は多いと思う。ましてや意外な所にいるかもしれない。
 - ・有難う。長らくお世話になりました。
 - ・私のマンガを捨てたり、古本屋に売ったりしないで(たたってやるーっ!!) 仏だん(?)の前にそなえといて...あと最新刊は連載終了まで足しといて...。←バカ!!
- (残った家族に対して)元気でね....。



わせて7回の、計9回の授業を担当した。

阪大に来る以前に音楽雑誌の編集者をしていたという社会人経験を生かして、福井高での今回の授業では、「音楽を聴く」というテーマで二学期に2回、「小冊子を編集する」というテーマで二・三学期あ

「音楽を聴く」授業から少し経った後に担当した「小冊子を編集する」の授業では、編集作業で実際に用いられる手順や技術を教えるというよりも（これを彼らに教えてもあまり意味がないと思い）、編集という作業に特有の物事の捉え方、いわば「編集的な思考」というものに触れてもらうことを主眼に置いた。「編集的な思考」がどのようなものかと言えば、たとえばA、Bという相互にあまり関係のなさそうな2つのテーマ群に対し、A、Bを結びつける第3のCというキーワードやテーマを見つけ出して、Cを差し挟むことでAとBの間に新しい関係を作り出す、そうした思考法のことを考えている。具体的に言うと、授業ではまず最初、生徒たちに各自関心があり記事としてまとめたみたいテーマを1つ選んでもらった（テーマA）。挙がった

テーマは、音楽、ファッション、ペット、お笑い、興味のある仕事、など。次にこちら（講師）サイドから、小冊子全体の共通テーマとして「E世代」ないし「高校」という2つを設定し彼らに投げた（テーマB）。生徒の作業は、共通テーマのどちらかを選択し、先に選んだ自分の関心あるテーマと結びつけて実際の担当ページの企画を練る、ということになる。

最初のうち、何をすればいいのかわからないといった様子だったが、何度か説明するうちに彼らなりの企画が生まれてきた。ファッションをテーマに選んだ生徒は「福井高校のファッション・チェック」という企画を考え、ペットを選んだ生徒は「高校生でも飼える／買える小さくてかわいいペット」という企画を、仕事をテーマにした生徒は「なりたい仕事を見つけるためにE世代ですべきこと」をインタビューして聞くという企画を作った。冊子の企画を立てること自体、恐らく初めての経験だったろうが、彼らの企画はどれも「編集的思考」というこちらの意図を理解した上での優れたものだったと思う。

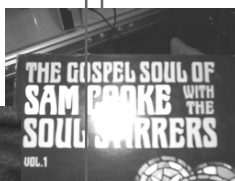
授業の流れとしては、企画立案後は、生徒一人につき2ページの担当ページを振り分け、企画に沿っての取材、写真撮影、原稿とりまとめ、ページのレイアウト／デザインなどの編集行程の各段階をすべて生徒に任せた。担当ページは最後まで自分で仕上げてもらう、岸田や他の阪大メンバーが原稿を書き直したり補ったりはしないと伝えると、次第に目の色が変わり、授業が終わりに近づいた頃には、

休み時間も休憩なしで作業を続ける姿が目立ち始め、時間内に騒いでいる生徒を生徒同士が注意する場面もあって驚かされた。理由は定かでないが、仲間内の

おしゃべりとクラス全体へ向けての発言に、以前ほどの落差がなくなっているようにも感じられた。講師が一方的に話す授業の形式ではなく、個別のアドバイスを中心にし、それを他の生徒にも聞こえるように行ったことで、生徒同志あるいは生徒と阪大メンバーとの間にある程度の理解が生まれたのかもしれない。

ただ、すべての生徒が自分の企画を記事に組み立てられたわけではない。いい企画を立てた

が取材が実現できず、企画の練り直しの段階に戻って記事作りを諦めてしまった生徒もいたし、最後までテーマAとテーマBを結びつけることができず、最終回の授業になってテーマを選び直した生徒もいた。仕上りのページとし



てうまく形になった生徒もいれば、そうでない生徒もいる。しかしいずれにしろ、そのすべてが、彼らがこの授業期間中に試行錯誤した結果であると考え、小冊子に最終的にまとめるに当たっては、前言通り手直しをせず、彼らの文章とアイデアをそのまま掲載した。いい企画をいいページに仕上げられるに越したことはないが、今回の授業は編集者養成が目的なのではなく、普段の学校の勉強ではあまり使わない思考法を試すことを重視したので、仕上がりが多少不味くともさしたる問題ではないと考えている。それよりも彼らの懸命さを各ページに見たいと個人的には思う。見た目も悪く、文章も読みづらい小冊子だが、それだけに味のあるものが出来上がったのではないだろうか。

(きしださとし)

「出会いの てつがく」

高校生たちと出会う
「てつがく」の授業

会沢久仁子

高校での「哲学」の授業は、日本では今のところほとんどない新しい試みである。臨床哲学研究室では、週一回二時間、一年間の授業を初めて引き受けるにあたり、この研究室に集まる多彩なメンバーがそれぞれこれまでやってきて考えてきたこと、そして今やりつつ考えていることを伝えることにした。それによって、高校生に哲学することを伝えようと考えた。高校生にとって、学校の外の大人たちに出会うことは、きっと新鮮なことではないだろうか。

しかし、事態はこちらの思うようには行かなかった。いくつかの授業報告をお読みいただければわかるだろう。話を聞くのが苦手な生徒が多い。すぐ寝てしまう。あるいは友達と喋り続ける。彼／彼女たちを動かそうにも乗せるのは容易でない。もっとこちらに関心を持ってくれないか、協力してくれないか、気を使ってくれないか……。また、なぜ関心を示さないのか、なぜ時に非協力的で、失礼なのか……。

一つには「それは学校だから」かもしれないと感じた。学校だから、他の多くの授業と同じくこの授業も、生徒たちは選択したとはいえ受けさせられているものと考え、だからこの時間を自ら積極的に有意義なものにしようとはせず、つまらなければ消極的で非協力的な態度を取る。

もちろん、授業をする側の問題はたくさんある。上手いかなかった授業は、生徒たちを十分に惹きつけられない要素がどこかにあったのだろう。生徒たちの興味の範囲や、聞き考え話す力に合っていないければ、生徒たちにとって乗ろうにも乗れない授業になってしまう。生徒たちの興味の範囲はそれほど広くないし、興味があって話し合いたいこと（例えば恋愛）があってもそれを上手く話し合う術を持たない。だから、授業をする側は生徒たちの興味に合うか、興味を引き出すように工夫しなければならないし、考えさせ表現させてそれらの力を伸ばしていくにも様々な工夫が要る。

さらに授業者には生徒たちと関わっていく力も必要とされる。福井高校の岡田先生からは授業にあたって、「教えようとするよりも、お兄さんお姉さんのように遊んでやってほしい」と言われていた。これは、生徒たちと親しい関係を築いてほしいとのことだろう。授業中に勝手に遊ばせて放っておいてよいのでは決してなく、こちらから生徒たちに踏み込んで、指示や注意すべきところはしつつ、楽しく引っ張っていくことが必要である。しかし実際はそのような関係をあまり上手く持つことができなかった。生徒たちはこの授業が彼／彼女たちを強制するものではないことを感

じ取り、授業に来るのを嫌がりはず、授業中も割りに自由に振舞っていたが、授業に乗らない様子は時々見られたし、生徒たちと授業をする側の特に一年間関わったコーディネーターとの距離は最後までいくらか残って感じられた。生徒たちに関わる力と技を磨くのも授業者の課題の一つである。

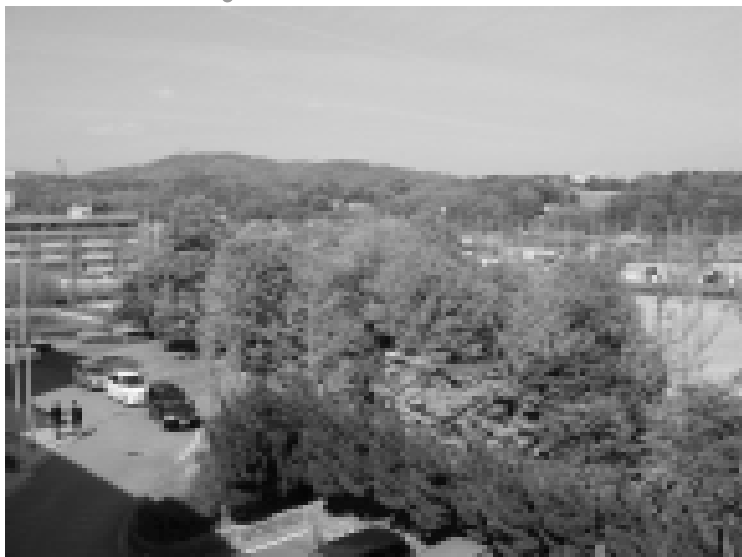
以上のように、学校で生徒たちと授業をしてみて、授業をする私たちは、なかなか不可解で対応し難い彼／彼女たちにどう迫り、関わればよいかに始終悩まされたのだった。

一年間の授業をコーディネートした高橋、三浦、会沢の三人は、各回の授業者のしたいことや伝えたいことを、いかに生徒たちに伝わる形で授業として実現するかを心を砕き、各回のプランを授業者とともに検討し、授業にも同行させてもらったつもりである。しかし、コーディネーターの非力な点多々あり、各回の授業を担当した方々は一回限りの授業を成功させるのはとても難しかったことだろう。お疲れ様でした。そしてありがとうございました。「出会いのてつがく」に関わっていただいたみなさんに、初めてのこの授業を曲がりなりにも一緒に作れたことを感謝し、お礼申し上げたい。

さて、この大変な試みを次年度も臨床哲学研究室で続けていけるかについては、十月の研究室の全体会授業をはじめ議論があった。それでも、やってみようというメンバーが集まり、続けることに決めた。（高校側の事情として、初年度はコーディネーターの一人が特別非常勤講師になり、各回の担当者はボランティア講師であったが、次年度はボランティア講師としてしか呼ぶことができないとの変化もあった。）初年度の反省として、二年目はプロジェクトの態勢の軽減が必要なことや、授業の開講を第一に重視してとにかく生徒を集めるのか、それとも受講希望者少数の場合の開講を見越しても哲学や考えることに興味のある生徒に絞って募集するのかの方針選択の問題があった。結局二年目は、各学期に一人がコーディネートし、全体の担当者数を減らして一人の担当回数を増やすことにした。授業のねらいや内容は、初年度と同様に担当者にある程度任せられ、したがって各担当者の裁量は増える。授業評価も、初年度はコーディネーターと授業者が相談して平常点で付けたが、それぞれ工夫することもできる。新たな主要メンバーで、初年度とほぼ同様のシラバスをまとめ、生徒たちに提示した。

新年度、受講生は24名に増え、2年生7名と3年生17名の合同授業になった。女子15名に男子9名と、女子の比率が増えた。これらの変化に伴ない、授業形態を新しくしなければならないし、生徒たちの反応も違ってくるだろう。すでに授業は始まり、担当者の悲鳴が聞こえている。二年目も試行錯誤しながら「てつがく」の授業を作っていくことになる。私たちにとって普通の高校生たちはとても手強い出会いの相手だ。彼／彼女たちと私たちとの出会いから「てつがく」の授業が次第に形になることを希望する。

（あいざわくにこ）



「出会いのてつがく」'02年度 終了アンケート 集計結果

臨床哲学のメンバーが一年間行ってきたこの授業を反省し、次年度以降の参考にするため、最後の授業で受講生たちにアンケートをお願いした。「批判したら成績に響くのでは？」という生徒に、「ノー。次の授業に生かすために批判してほしい。」と返したが、果たして力を込めて批判してくれただろうか。

1. この授業を全体的に評価すると？ 5 - 4 - 3 - 2 - 1

* グラフ挿入 (2人—2 - 5 - 0 - 1人)

(* コメント) 全体的評価はまあまあであった。4 と評価した生徒は、「けっこう楽しかったし、学校でもやらないこととかあっておもしろかった。」と書き添えてくれた。

2. 印象に残った授業を挙げてください。

(複数回答) 「雑誌づくり」・「ざっし作り」・「ももさん」・「吉見さんと百々さん」・「ざっし モモ 車イス ファッション れんあいマニアの人 岸田さん」

「良 雑誌くれた時の授業。 悪 介護士の次の人の授業は辛かった。」

「・クローンについて考えたり、話を聞いたりした時。(もともとこうゆう話好き)

・車イスに乗って学校の外へ行った時(たった1～2cmの段差と坂に苦戦...。)

・6 / 4の助産婦さんの話(ちょうど私の誕生日でした...。)

「最初の方の「わしだ」？さんの「あいさつ」の授業」「特になし」

(コ) 三学期の雑誌作りや、ファッション美術館の百々さんは特に印象に残ったよう。

3. もっとここをこうしたらいい、こうして欲しいということはあるですか？

「ぱっとしなかったので...」

「おもしろく、長い話はおもしろくない」「講師の人の話はなしだけのときはつらい」

「一つのテーマをもっと長くしてやったらいい。一週間2時間1テーマではなくて1ヶ月8時間1テーマ。」

「恋愛のことについてもっと時間を取ってほしいかなと。」

「自由度をもっと高くしたらいいと思う。」「自由なであいをしたい」「特になし」

4. もっとこんなことがしたいということはありませんか？

「学校の外に出るようなことを多くしたらいいと思う。」「スポーツ」

「ない」・「特にないです」・「特になし」

(コ) 3と4への回答は、授業をする側にとって難しい要望ばかりだが、これらを受け止め、できるだけ応えていきたい。

5. 現在選択しているエリアと、進路の予定を教えてください。

現在のエリア名：情報表現 6名 うち表現(音楽) 1名以上、(美術) 2名以上

スポーツ健康 2名 福祉 1名

国際コミュニケーション 0 環境自然 0 理数 0

回答なし 1名 * グラフ化する

進路の予定：進学 大学 3名 / 短大 / 専門学校 3名 / 就職 3名 ? 1名 * グラフ化する

希望の学部や分野、仕事があれば教えてください。

(進路) 大学：「分野→美術系、仕事→イラストレーター(動物、まんが系)など」

「福祉などに行けたらいいなと。あと農業などもいいと思う。」

「日本史の勉強がしたい」

専門学校：「福祉関係。整備(車)関係」「コンピュータかんけー」

就職：「音楽」「ゲーのー」

(コ) 情報表現エリアの選択者が多かった。進路予定は大学も就職もさまざま。

(コ) 生徒たちは、この授業は嫌ではなかったが、もっと面白くするよう望んでいる。また、この度も「コンピュータかんけー」とか「げーのー」との表現を見ると、我々ももう少し何とかできることはないかと思わなくはない。ともあれこの授業の受講生たちには一年間の出会いに感謝し、これからも元気で活躍してほしい。そして我々ももう一度、福井高校で「出会いのてつがく」に臨もう。

'02 年度「出会いのてつがく」協力者（肩書きは当時）

鷲田 清一 臨床哲学教授
百々 徹 神戸ファッション美術館学芸員
本間 直樹 臨床哲学講師
玉地 雅浩 高雄病院理学療法士
伊藤 悠子 芦原病院看護師
霜田 求 大阪大学大学院医学系研究科医の倫理学助教授
中岡 成文 臨床哲学教授
岸田 智 臨床哲学博士後期課程
吉見 由香 フリーアナウンサー
重信 嘉彦 介護老人保健施設ニューラーフガラシア介護福祉士
西川 勝 介護老人保健施設ニューラーフガラシア看護師 / 臨床哲学博士前期課程
田中 俊英 ドーナツトーク社 / 淡路ブラッツ / 臨床哲学博士前期課程
稲葉 一人 京都大学大学院医学系研究科 / 科学技術文明研究所特別研究員
Lyudmila Slavianska 臨床哲学博士後期課程
高橋 綾 臨床哲学博士後期課程
三浦 隆宏 臨床哲学博士後期課程
会沢久仁子 臨床哲学博士後期課程

臨床哲学のメチエ Vol.11 2003 冬春号

総編集：本間直樹

編集：高橋綾＋会沢久仁子＋三浦隆宏＋紀平知樹

大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学研究室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5

clph@let.osaka-u.ac.jp

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/clph/>

